

何うかすると夫れが悪い事に使はれぬとも限らぬ。然る時は此の金の爲め悪い結果を見ねばならぬ、誠につまらぬ事となる。又吾々が此の株を賣つて大金を得れば、他の人も亦之れを聞いて、この株を賣る者が續々として出るだらう。而して之れを買ふものは、何んな者であるかと云へば、必ず吾々より信用少い人が多いに定まつて居る。斯くて此の株は元來暴騰したものであるから、一度は必ず下落する時節が来る。其の上今迄は信用ある人が持つて居たから高かつたが、不信用な人の手に移れば下落するは當然である、下落すれば會社の沽券も下り、買つた人も非常に困ることとなる。斯の如く内にしては召使の嫉みを起し、悪事に之れを使ひ、外にして買つた人を困らせ、會社の沽券を下落せしめ、内外共に損あつて益なく、只餘す所は一時大金を懐にしたと云ふ丈けて、誠につまらぬ事となる、故に賣らぬ事を主張してとう／＼賣らなかつた。

又丁度其頃には自分の會社の商業として居る染料が暴騰したので、俄かに莫大の利

益を得たのである。其利益は社員残らずの者に分配したが、之れを分配するに當つて、分配金の幾割を天引して、之れを番頭以上家族のあるものは、其郷里の出身の小學校に送つて小學資金に寄附した。これは小額であつたから小學校に送つたが、自分始め重役の分は少し額が多かつたので、郷里の縣廳に送つて、植林事業費に充てたのである。畢竟これらの事は皆佛教の自他平等の觀念から報恩主義に基いて取計らつたのである。

さて其報恩主義に就て自分が日頃考へて居る事はかうである。今日最も吾々が大切とする生命財産を安全に保つことが出来るのは國家の保護あるが爲めである。國家の保護は法律の保護で、法律の保護は、取も直さず陛下の御加護である。而して法律最上の精神は道徳と一致するものである。されば之れに對する報恩はと云へば、國民としては納税の義務を怠らぬ事が第一である。然るに今日世上の紳士と稱せらるゝ人にして、適法律に不備なる點を發見すれば、之を悪用して、脱税するものが

ある。例せば數萬坪の邸宅を構へて居ながら、其或る部分は敷地として宅地税を脱れ、又は賣買上の數字を暗まして租税を脱れて居る。甚だしきに至つては幾回督促を受くるも更に納税せず、裁判上の手數迄掛けるものが往々にしてある。而も之れを上手にやるのが、利巧だと思つて居るものが、紳士紳商と稱せらるゝ人の間にあると云ふに至つては、慨嘆に堪へざる所ではないか。是れ等は最も商業道德に影響して、其行はれざる一大原因となつて居る。即ち上に立つものが、斯る事を爲して恰も當然であるかのやうに、少しも恥づる所がないから、下に召使はるゝものも亦自然と之を見習つて行く。かゝる事何うして道德を向上せしむる事が出来やうか。斯の如き事は日に月に益進歩發展せんとする我が商業界の非常なる障害となるてあらうと思ふ。

昔より「損と元價で倉が建つ」と云ふ諺があるが、如何にしても損と元價で倉が建つべき道理はない。これは商人が餘り方外なる利益を貪つて、後日に信用を落し

損失を招く恐れがあるので、自利を捨て、利他を勤めよとの誠めである。この利他的の道德觀念が大乗佛教の菩薩行の眞精神である云々。

柄は此の話を聞いて實に感心に堪へなかつた、現今天下滔々として自利のみを計る商人の間に處して、萬綠叢中紅一點とも謂つべき美しき行ひである。凡そ佛教を信ぜん程のものは如何なる職業に従事するも此の位の事はあらねばならぬ、これが大乘佛教の眞精神であり、眞の菩薩行であると思ふ。佛教を哲學として研究するのも悪くはない。物好にやつて見るも決して害はなからう、只單に後生を願ふのも、願はぬよりは増してあるが、然し其等は吾々が日常の生活と直接に關係する所が薄く、従つて又人類社會に取つて益する所も尠い。猶又現世に於ける非理の利益を望んで信ずるものもあると云ふに至つては沙汰の限りではあるまいか。何うか皆様も此處の道理をよく辨へて、大乘佛教の眞精神を呑込み、之れを信じ之れに依つて道德の根柢を確立し、今日世界に謠はるゝ我昔の武士道のやうな嚴然たる商業道德を完成して、世界各國の

間に處して「日本の商人ならば」との名聲と信用とを博し、益我國の商業界に貢献せられん事を御願致して置く次第であります。(大正五年五月八日)

第十七 鼻孔を通ぜよ

一 鼻の用心

余が十六の年、始めて行脚に出る時の事であつた。門前の百姓家の婆さんが「小僧さん、婆の頼みだが、鼻を落さぬ様にして歸つて下さいよ」と云つた。失禮な事をいふと思ひつゝも、別れを告げて出發したが、十九歳の時に歸つた時、其の百姓家を訪れると、婆さんは余の顔を見るや否や「小僧さん、鼻は何うだつた、おオ在つた〜」と悦んだ。夫れから其の翌年上京する際にも「鼻を落さぬやう」と云つた。二十三の歳に歸つた時は、余の方から「婆さん、鼻は無事で歸つたよ」と云つたら、非常に悦んで居たが、二十五の時再び上京する際にも、彼の老婆は「何うぞ鼻を大事に頼みます」と

云つた。それから三十四の時に寺に歸つたが、其の時にも彼の老婆は「鼻が無事で結構であつた」と悦んだ。其の時自分は是迄變なことを云ふ婆さんだと不審に思つて居たが、其れが警誠の語であつた事を感じたのである。然るにその老婆は年六十近くになつてから、病毒の爲めに鼻を落して遂に死んで仕舞つた。二十年以來余を警誠して居た彼女の女が、却つて自ら鼻を落して死んだのは憐むべきことである。併し之れに類した事は、世間には随分多いことであらうと思ふ。

予は明治二十六年に、海水が耳に這入つた爲め耳中耳炎を發して、常に膿が流れ出て居た。一度治療を試みたが、一時癒つても再び發り、其の後再三専門家の診療も受け、出来る丈の手を盡したが、癒つたかと思ふと又出ると云ふ具合で、根治することがなかつた。昨年九月から又起つたので、主治醫にかゝつたが、三ヶ月を経過しても、全く効果が顯はれない。夫れて主治醫の紹介に依つて、ドクトル高橋研三氏の診療を受けた。氏は明治二十七年から洋行して、耳鼻咽喉を専攻し、大正元年に歸朝し

て、獨特の伎倆を振り、當今では斯界の泰斗として知られて居る人であるが、氏の診断に依ると、此の中耳炎は全く鼻の不完全から發するもので、鼻が閉塞して居る爲め、中耳が壓迫されて其處に充血する、それから膿が流れ出づるのである。夫れ故に其の病原たる鼻を治さなくては、中耳炎の根治は六ヶ敷い。若し鼻の閉塞が去つて、耳との關係が流通すれば、耳は自然に癒るものであると云ふ。此の説を聞いて驚いた。余は是迄自分の鼻が悪いと云ふことは思はなかつたが、此時初めて自分の鼻が完全でないことに気が付いた。といふのは、鼻が不完全の爲め、自由に呼吸が出来ず、口で呼吸を補つて居たのである。夫れて鼻が不完全故耳が癒らぬと云はれて、始めてこれまでは其の病の根本たる鼻を打ち捨て置いて、枝葉たる耳にのみ醒醒して居たわけである。それで高橋氏の診断を信頼して、十二月一日（大正五年）に、本郷追分なる高橋耳鼻咽喉科病院に入院して、二日に第一回の手術を受けた。最初は二週間入院して、退院後二週間もせば、完治するといふ豫定で手術を受けたが、五日を経て怪しむ可き

現象を呈し、十六日目に到つて能く調べて見ると、鼻の奥が腫れて居る。そこで此の腫物を切解すると、膿が流出した。ところが何うしたものか、それに細菌が這入つた爲め、更に切解して翌日第二回の手術を受けたやうな始末で、豫定の入院期間よりも手間取つて、本年一月七日即ち三十八日目に退院したのである。

扱て此の細菌が這入つた事は、初め鼻の右の穴裏に、フロンケルと稱する一種の腫物があつた。其腫物の細菌が、何時の間にか奥に這入つたのである。余も此のフロンケルが如何なる病原に依るか知らなかつたが、後で醫師の話聞けば、鼻の中を指てほじくる場合に、爪が中つて傷を生じ、それが腫物となるといふ。鼻の取扱には充分注意しないと、ゆゑしき病を發すのである。

二 調息

調息とは、呼吸を調へることで、禪經に五調といふことがある。即ち調食、調眠、調身、調息、調心の五ツで、調食とは、食物の適量にして、過不及のないこと。調眠

とは、睡眠不足とか、惰眠といふことをせず、適度の睡眠をなすこと。調身とは、調ゆる身相を調へること、坐禪の儀則に依つて坐すること。調息とは、身相を調へてから、呼吸を調へること、呼吸が調へば自ら心も調うて、昆沈散亂することがない、之れを調心と云ふ。殊に調息調心に就ては、『坐禪儀』や『坐禪用心記』等、其他にも種々説明してあるけれども、多くの人が調息のことに就ては、餘り重きを置いて居ないやうである。只息を氣海丹田より出入するものであるとか、或は鼻息微かに通ぜよとか、或は又息は長短自然に任すと云ふやうな事丈を云つて、果して息を調ひ得て居るや否やを、禪者も看過して居るやうである。余は從來坐禪をして居る際に口を閉ぢて鼻息を通ずるのに苦しく、口で呼吸を補つて居たのであるが、前にも云つた通り自分の鼻が不完全であると云ふことを自覺せなかつた。然るに今回高橋ドクトルの説明を聞き、且つ手術を受けて、從來閉塞して居た鼻が開通するやうになつてからは、呼吸が自由になつて、坐禪の時は申すまでもなく、行住坐臥如何なる場合も、口

を閉ぢて氣海丹田より呼吸することが自由になつた。斯して始めて調息の眞儀が行はれることと思ふ。然し猶未だ手術後日も浅いこと故、高橋氏の謂ゆる、鼻患が病根となつて居る中耳炎の根治といふ効果は、未だ見ることは出来ないけれども、調息は、以前より非常に樂になつて來て居る。大體五官の中でも、目が物を見る、耳が聲を聞く、口が物を食ふ、體を物に觸れるといふ如きは、其の作用が顯著である丈に、少しも不完全なことがあれば、直ちに氣付くのであるが、鼻の鼻を辨ずる事は、非常に感じの鈍いものである。香道とか茶道に趣味のある人は、嗅覺の發達が人一倍にあつて、始めて茶香の趣味が起ると思はれる。て耳や目、その他の機官が不完全になると、直ちに治療するのであるが、鼻の疾患不完全には治療を急がぬ。顔面の中心にあつて、而も一刻の間斷もあらば、生命を失はねばならぬ生命の關門である鼻を、粗末にして居るのは、畢り生命知らずと云はれても仕方があるまい。若し鼻が不完全なれば、空氣の呼吸が不完全なる爲め、身心共に少らぬ惡結果を生ずるのである。例せ

ば感冒又は氣管病の如きは、即ち鼻の不完全なる爲め、外界の空氣を冷しもせず又暖めもせず、其の儘に呼吸したり、鼻が閉塞したる爲め、口で呼吸するところから發するに到る。又精神上にもさうて、鼻と腦とは密接なる關係がある鼻が不完全なれば腦病を起し易い、従つて氣力が乏しくなり、精神が憂鬱になるのである。故に坐禪中にあつても、息の調はざる爲めに、調心が出来ぬと云ふことになる。坐禪中病の起ることは『用心記』の中にも種々示されてあるが、斯かる大切な鼻は、世間多くの人が、輕々にして一向お構ひなく、諸病の苦を招いて居る事を、余は今度經驗上から非常に氣の毒に思ふ次第である。此の點から云へば、余はこれまで鼻の形は壞はさなかつたが、鼻の取扱も知らず、眞の調息を爲得なかつたのである。恰も彼の老婆と同じく謗を免れないのである。然し今や、鼻の手術を受けて、鼻の大切なることは勿論、坐禪即ち調心に如何に大切なるかを自覺して、大いに愉快を感じて居る次第である。

三臥相

行住坐臥の四威儀を調へることは、昔から八ヶ間敷云ふことである。行住坐は申すまでもなく、大體に於て異論なきところであるが、臥相に就ては、古來禪門などで「頭北面西右脇臥」と謂つて、頭を北にし、面を西に向け、右の脇を下に臥するのが、僧侶の臥相とあるので、余も小僧時代からその習慣がついて是までやつ来た。ところが、今度鼻の手術を受けると、横臥することが出来ない。當分は左も右もならず、仰向になつたまま、兩脚を伸べ、兩手を下げて臥した。曾て醫師が云ふには、「頭北面西右脇臥と云ふやうなことは、それは信仰から云つたかも知れませんが、自然てない。人は立つも直立、坐るも端正、行くも亦頂天立地と云つて、凡てがその通りであるからには、臥する時にも亦自然てなければならぬ」と云うたが、今度熟々考へて見るに、「行も亦禪、坐も亦禪」と、永嘉大師が云はれた如く、坐禪の時の正身端坐が調息調心に必要であるなれば、行住臥の時も端正て自然に契はねばならぬ。而して初め

て自然の調息調心も出来、身心共に安樂の境に到ることと思ふ。因みに若し人々鼻孔を見て、不完全なところがあれば、速かに治療し、然る後身心共に禪を參究せられたものである。(大正六年二月八日)

第十八 見やう聞きやう

一 己れが見た、己れが聞いた

「己れは確に見て来たのであるから、決して嘘では無い、現在雙つの眼で見とめて来たのであるから、是位確かな事は無い」と、自分の實見した事は、何人も同様に認めるものと思つて、多くの人に向つて威張つて保證に立つ。一人の眼といふものが、百人千人の眼に勝るほどの能力があるであらうか。イヤ敢てそれほどの自信をつけての上ではなくとも、兎に角自分の見た事は、確實に間違ないと思ひ、他人の見たということに、十分に信用を置かねることが普通の人情である。

「己れが確に聞いて来たのであるから、間違ひはない、他人からの又聞ては無い。己れが直に聞いたのであるから、是位確かなことではない」と、最早百人千人出来つても、斷じて動すことはならぬ様に言ふ。これが自分が敢て非常な學者、識者であると思はいても、只自分が聞いたといふ、それだけの事が、非常に力づよいものと考へて居るから、斯様に固く保證をするのである。

外に理由は無く、只自分が目で見、自分が耳で聞いたといふことだけで、斯く確實と認めて居るけれども、その自分の目、自分の耳といふものが、どれだけ確實な能力があるものであらうか。目のよい者とわるい者、耳の近い者と遠い者によつて、物の見やうも違ひ、聲の聞きやうも異なる。まして自分の立つて居る位置によつて、見方聞方の異なることは更に甚しい。同じ景色を観るにも、透明色の目鏡をかけて居る者と、紺色の目鏡をかけて居る人では、景色の色彩が違つて見える。寫眞を撮るに同一の景色でも、レンズの向けやうで、全く違つたやうな景色が映ることがある。

二 着團帳賣

余が先日神田神保町の中央佛教會館に演説に赴く途中、電車で牛込北町邊を通る時、満員の爲め、ツリ皮に手をかけて立ちながら向ふを観れば、或る商店の看板に「着團帳賣」と横に書いてあるの見た。ハテ奇妙な看板であると思ひ、よく眼を張つて視ても、白くペンキで塗つた看板に、墨黒ろくろと楷書でかいてあるから、讀み違ひではない。けれども着團帳賣とは何の事であらふ。着團帳といふ帳簿を賣る店であらうか、それにしても着團帳とは、ドンナ帳簿であらふ。何か新發明の帳簿でいもあるか、まさか着團といふ團體があつて、その團體だけは、現金でなくても、帳面に記載して置けば、掛賣をするといふ意味でもあるまいかと、種々の考を廻して居る中に、肴町で車中の客がドント降りて、椅子が空いたので、余もそこに腰をかけて、そして又向ふを視れば、夜着、蒲團、蚊帳、販賣と書いてあつたので、何んだ馬鹿々々しい。これでは余が電車の中に立つて居て、車窓の外をのぞき、商店の屋上に掲げてあ

る、看板の下の方半分だけしか見えぬものであるから、二字づゝ横に列べて書いてある、夜着、蒲團、蚊帳、販賣の八字を、夜蒲蚊販の四字を遺して着團帳賣の四字だけを見て、種々と理窟をつけて考へ込んだのである。この時車中で獨り自らその馬鹿らしかつたことを嘲つたが、しかし斯様の誤解は世間に幾何もあることであるけれども、多少入り込んで居るので、ハツキリと分からぬだけのことである。己れが確に見て来たというても、看板の下の方半分だけを見て、上の方半分を見落して、それで斯様な看板が掲げてあつたに相違ないと云つて、之を確な事實であると主張したならばドンナものであらふ。

三 畑が飛ぶ

出雲の能義郡山佐村といふは、海岸から六里も隔つて居る山間の村落であるので、昔は一生涯に海を見ずに死ぬる者も有つたといふ位な邊鄙な地である。一體山陰道殊に因伯雲石の四國は久しく鐵道も敷かれず、漸く近年になつて京都から直行するや

うになつた位であるから、他國と交通も少なく、随つて智識の進歩も遅い。殊に斯る山家になつては、四十五十の老人は頭は斬髮になつて居ても、頭の中には未だチヨン鬚を結つて居る者が多い。先日その山佐村の五十ばかりになる老人が、娘を連れて美保關明神へ參詣するとて、出雲の安來驛から汽車に乗つて、伯耆の境驛へ着き、それから舟で美保關へ渡る豫定であつた。トコロで此の老人は汽車に乗るのは今度が始めてある。安來から汽車に乗り込み、汽車が海岸に沿うてクル／＼廻つて走ると、老人は大に驚き、ハ一山が廻る、畑が飛ぶ、ソレ樹が倒る、サ一大變だ、イヤこりや眼が廻る。コレ娘、眼を塞いで居れ、必ず眼を開けるな。眼を開けて外を見ると、眼が眩んで倒れるぞと、大きな聲を張りあげて騒ぎ立てるので、車中の乗客は、この體を見て大に驚き、サテは氣狂であるさうなと、ソツト笑ふ者もあれば、氣毒がるものもあつた。列車の速度が早くなるに随つて、彼の老人は益々恐れ、眼が廻り、頭が破れるやうに痛む。これで八里も引つ張られては死んで仕舞うと云つて、娘が止める

のも聽かず、とう／＼米子驛で下車して、境迄五里の路を徒歩で行つたといふ。これは近頃上京した山佐小學校教員の話であるが、この老人の實驗によれば、汽車は、眼が廻り、頭が痛み、遂には生命までとられるものと斷定せられることになる。個人の實驗、判斷の當にならぬことは斯の通りである、自己の境遇、自己の習慣によつて、事物の利害得失を異にする。都會に住まつて居る者と、田舎に住んで居る者。海岸に居る者と山間に居る者。みな習慣が違ひ境遇が異なるから。生活上の趣味も亦決して同じくない。汽車は旅行には第一の利器である。東海道等鐵道に沿うた田家の農夫等は、日々隣村の田畑へ往復するにも汽車を利用してする位であるのに、山佐村の老人の如きは、非常に恐れて、惡魔の如くに思つて居る。しかし是れは汽車や電車ばかりではない、その外の乗物で矢張かやうな事はある。

四 山が動く

國文學の驍將武島羽衣君は、極く船に弱いので、此程日本歌道獎勵會の巡回講話

で、新潟から酒田へ航海の際は、種々船酔豫防法を工夫したが、結局食事をせず、酒を呑んで、乗船早々寝るより外ないといふに極まつた。ところが先生生憎酒が嫌いなので、キ、メのある酒をと、手形のウイスキーを一瓶懐に忍せて、乗船早々我慢して忽ちの中に其一瓶を平げた、それ迄は無事であつたが、暫くすると羽衣君「ア、風が起つて来た、波が荒れる、ソレ向ふの山が動く、大變々々」と、池邊義象君を始め、二三同行者の安眠を妨げ出したので、一同驚いて起き出すと、何の事、船は鏡の上を行くやうな安穩なので、一行はホト持て餘したさうだ。

これは八月廿四日の『朝日新聞』にあつた記事である。船酔をする者は世間に多い、が、しかし平穩鏡の如き海上を行くに「ア、風が起つて来た、波が荒れる、ソレ向ふの山が動く」は甚だしい。船には酔はぬ山家の老人が汽車に酔うて目が廻ると聞いて、馬鹿者と云つて笑ふなら、都會に住んで、年中汽車で旅行をして居る學者が、汽船に酔うて、大騒動をしたのは猶ほ可笑しい。汽車も汽船も、酔うといふことは同じである。

である。

自分の心が先づ酔うて、その酔うた上から、山や川が動くと云ふ感念を起し、それが事實であると判定せられては堪まらぬ。この世は苦界である、厭ふべき處だといふのは、世間の名利恩愛に執着する輩を教化する方便としては、時に利益であらふが、實際は決して苦しい世界といふべきものはない、その苦界と思ふのは但各自が其立場から見ただので、其の真相ではない。世界そのものは、初めから苦でもなく、樂でもなく、厭世とか樂天とかいふことは、人間が各自の立場によつて勝手に付けた相場に過ぎぬ。己れが目で見え通りのことが、必ずしも事實の真相でない、隨てその見たといふことが、善惡邪正を定める標準にならぬことは斯の通りであるのみならず、己れが聞いたといふことも、矢張當てにならぬ。

五 言は有限、意は無限

人の言は限りあつて、人の意は限りが無い。限りの有る言を以て、限りの無い意を

顯はすことは、到底不可能の事であるというても、意を外に顯すことは言が第一である。勿論、時として手真似、身振で自己の意を他人に通ずることもあり、又目もとて知らずこともあるけれども、これは已むを得ぬ場合であつて、どうしても多くの場合は言語である。その言語は思想の全分を傳へることが出来ぬとすれば、之を聞くにも頗る注意を要する次第である。

芳野山花爛漫と咲きにけり

これは昔の腐儒者が詠んだ句であるさうだが、別に間違つて居らぬから、今日の屁理窟をいふ奴に言はすれば、芳野山の句として不都合なことはないであらふ。しかし『花爛漫と咲きにけり』は芳野山に限らぬ『嵐山』とかへても、『向島』としてもよい、花の満開の時は、何處へもいへる詞である、何處へても用らるゝ詞であるから、吉野山へは的切にない。

これはく〜とばかり花の吉野山

これは吉野山の櫻の満開した時の景色は、只これはく〜と驚歎するより外に、何ともいひやうがないというて、却て吉野山の景色の非常に勝れてあるといふ意を顯してある。

松島や嗚呼松島や松島や

これも松島の絶景は、只ア、松島や〜と驚歎するの外、一語もつけることは出来ぬというて、無限の意を十七字にあらはして居る、この二句はツマリ詞には言はれぬというて、詞以上の意を云ひあらはして居る。

自分の思想そのまゝを、思ふ儘に言語に顯はすことが出来ぬといふことは、何人にも自分に考へて能く知れる、ところで他人に對しては、往々己がこれほど言ふのに、是れが何故解からぬであらうか、何故通ぜぬのであらうかと、愚痴をこぼすことがある。この時は自分の云ふ詞が、十分に他に通ぜぬといふことを認めて居る。然るに他人の言語を聴く時は、自分の時のことはスツカリ忘れて仕舞つて、他人の言語通

りに解せんとする、これが間違であるけれども、そこが凡夫の我儘である。

小兒は無邪氣な者で、他から褒められれば自分の仕た事を善く出来たと思ひ、貶されれば拙いと思ふ。小兒は智力がまだ發達して居ないから、自信力が無いで、その巧い拙いといふことも自分には判定がつかぬ。他人の言次第で、喜びもし悲しみもする、成人になると他人の挨拶に就いても一言一句注意して聞取り、その上で種々と思考を費して判断する、が、それには又自分我手の考も雜つてゐるから往々判断を誤る、殊に自分の毀譽褒貶に關しては、平常から心がけて居ても心を動かす。譽められれば阿諛追従とは知りながら、心の中で窃に喜び、毀られれば事實と思ひながら腹の中で怒る。これ皆他人の言ふ詞そのものを信じて、自分の身の上を顧ないからである、他人の毀譽褒貶に對しては「介り立つて八風吹けども動せず」といふ境界に至らねばならぬ。さもなければ、年は何程取つても、頭は白くなつても、矢張小兒と同様である。小兒はさしたる害は無いとして、世の中に立つて働いて居る成人の小兒は、

忽ち倒れて人に踏みつぶされて仕舞ふ。

六 良薬と鳩毒

「良薬は口に苦きも病に利あり、忠言は耳に逆ふも行に利あり」といふ古語もあつて、他人から自分の足らぬ處を攻めて諫言、忠告を受けた時は、よい氣持はせぬけれども、これは良薬と思つて服膺すれば必ず成功する、之に反して他人から賞讃を受けた時は、嬉しい感じがするけれども、その賞讃諛辭に誇つては、鳩毒といふ恐しい毒薬を服するやうなもので、忽ちその身の破滅となる。

先月三日に静岡に開かれた大日本佛教青年會の講習會に出席した際、その幹事の一人名なる依田某といふが、各宗の委員や、發起人等の間に晝夜奔走して、非常なる盡力をした。某は東洋大學を卒業して未だ日も浅く、年も未だ少いので、諸處から種々の非難攻撃を受け、時としては殆ど堪へられぬほどの罵詈譎を浴びせかけられても、一向平氣で、何時も驚かず、イヤ私は未だ年が少くて經驗が足りませぬから、不行

届や、失策もありまじやうが、何卒御勘辨を願ひます、私の不東な處は幾重にも謝しますから、何卒この會の成立つやうに御盡力を願ひますと云つて、頭をさげて頼みます、一、二の一點ばかりで斡旋したので、一同もその熱心に感じて、茲に各宗各團體が協同一致して開會することになつて、いよいよ開會して見れば、最初の豫想の四倍も來會者があつたので、一同意外の盛況に満足したさうである。そこで依田氏は、諸方から種々の攻撃を受けましたから、自分には其れだけ盛に此の會を開かねばならぬと思つて奔走しましたが、幸にして斯く盛況を見るに至りまして、これ程難有いことはありませぬ、と謙遜な喜びを陳べて居られた。これは他人の毒言を取つて自分の良藥にしたと謂ふべき聞き方である。學生上りにしては感服すべき人であるから、江湖に紹介する次第である。(大正六年九月八日)

第十九 古禪僧の感化

余は去る七月二十七日(大正五年)東京を出發して、愛媛縣三郡の講習會に出張し、八月二十八日に歸京した。講習會は東宇和郡魚成村の龍澤寺に於て七日、喜多郡五城村の高昌寺に於て五日、越智郡今治町の議事堂と大雄寺とに於て五日、都合三ヶ所、十七日間であつたが、其外に東宇和郡宇和町の小學校、同野村安樂寺、喜多郡大洲町法華寺、同内子町禪昌寺との各所に於て各一場の講演をなした事である。この各地は去る明治三十五年の春、本山布教師として、一回巡教したこともあつたが、只一日の逗留では、何等の視察も出来るものでなく、甚だ遺憾に堪へなかつた。然るに一昨年前に龍澤寺の講習會に出席して、一週間講演をなしたのが縁となつて、今年再び同地に出張する事になつたのである。

宗教の様子はその土地によつて異なつて居るものであるが、四國は弘法大師垂化八十八ヶ所の靈場があるから、全體に於て、弘法大師の感化の深いことは申すまでもないが、その外に付いては四國多少異なつた點がある。その中伊豫だけにても又多少異

なつた處があるが、宇和島と大洲とは特に臨濟宗の勢力が盛んである。是れには種々の原因もあることであらうが、近代に於て宇和島にては誠拙和尚、並に、其弟子の晦巖和尚が出世せられ、大洲に於ては盤珪和尚が教化を敷かれたから、その餘光であると思はれる。

一 誠拙和尚

誠拙和尚は宇和島の人で、宇和島の佛海寺靈印和尚の沙彌となつて修行をして居られた時、藩主伊達公が佛海寺に參詣して、靈印和尚と話をして居られた折柄、公が和尚に命じて按摩をさせられた。その時、公、和尚に對して、「小僧、余が江戸に赴つて歸りには、其の方に美しい法衣を買うて歸つて與へるから、叮嚀に按摩せよ」と云はれたによつて、和尚は、「それは難有ございます」と禮をいはれた。その後公が江戸から歸つて、又佛海寺に參詣して、前の如く按摩を命ぜられたので、和尚は、「殿様、御約束の法衣は求めて御歸りになりましたらうから、頂戴したうございます」と云はれると、公

「イヤその法衣はトント忘れて居たから、此の次に赴つた時に買うてやる」と云はれた。スルト和尚は、「コレはけ然らぬ、この嘘語つき奴」と云ひながら、拳をかためて公の頭をボカリと撲つて去られた。靈印和尚は之を見て大に驚き、スワ一大事が起つたと、非常に心配せられたが、公は呵々と打ち笑ひ、「これは余が悪かつた、この小僧はなか／＼元氣のよい奴である」と、却つてその氣概を賞して立ち歸り、竊に學資金を與へて學問修行させられたから、後に果して大徳となつて鎌倉圓覺寺へも出世せられた。

二 晦巖和尚

晦巖和尚は、名は廓道といつて、別に萬休とも號し、宇和島の金剛山に住し、後には妙心寺へ出世せられた。曾て宇和島侯が和尚の室に入つて對話の時、侯が園中の大名竹といふ竹を指して、「何故に此竹は大名竹と呼ぶ」と尋ねられると、和尚、「それは此竹が只大きいだけで、何の用にも立たぬから、名づけたものであります」と答へられたので、侯は笑ひながら、「和尚は甚いことをいうてはないか」と云はれた。又一日、侯

が、「佛經の中には『一佛頭上に化身物を出す』といふ語があるが、今時の僧にはかやうな神通力を具へて居る者があるか」と尋ねられると、和尚、「拙僧は朝から晩まで頭上に化身物を出して居ますが、只侯が盲目で之をお見にならぬだけであります」と答へたので、侯は、黙つて仕舞はれたといふ。余は誠拙、晦巖の筆蹟を見て、其人物を想像するに、誠に近古の高僧であつたに相違ない。それであつたればこそ、一國の城主を、大人が小兒を弄ぶやうに取扱はれたものである。古の禪僧は斯様な氣概があつたから、一言一行の中に無限の感化を與へた、其餘澤が今日まで及んでゐる。

三 盤珪和尚

和尚は播州網干の龍門寺に住して、彼の赤穂の義士大石良雄等を教化せられたこともあつた、世間に著名な人であるが、其大洲の城主加藤出羽守泰興を接する、亦自ら侵すべからざる威嚴があつた。全體盤珪和尚の教化の仕方は他の臨濟宗の高僧連と、少しく異なる所があつて、今日でも猶ほ異議を唱ふる者があるやうであるが、余

等が觀る所では、和尚の方が綿密で正しいと思ふ。大洲の城主加藤侯が初めて和尚に心要を問はれた時、和尚、「侯は中江藤樹の大賢をして、空しくその國を去らしめられたやうなことは、心要を問うても、容易に解るまい」と喝破せられた。侯は年少くして劍術槍術を好んで居られたが、一日和尚が侯の側に坐して居られた時、侯は忽ち槍をシゴキ、一聲叫んで和尚を刺さうとせられたが、和尚は毫も怖る色なく、徐に珠數を以て槍の鋒尖を拂ひながら、「其技が未熟であるから、槍より先きに心が動いて居る。そんな事では實地の用に立たぬ」と云はれたので、侯も深く和尚の道力に感服し、節を折つて師事し、後遂に大悟して、槍術の奥妙に達せられたといふ。

盤珪和尚は加藤侯の歸依を受けて大洲郊外に如法寺を開いて、其處に於て説法教化せられたので、如法寺は今猶莊嚴なる堂宇が存在して、和尚の徳光を輝して居るが、只こればかりではなく、大洲の町には臨濟宗の寺が四ヶ寺もあつて、その勢力が亦甚だ盛んである爲めに、曹洞宗は勿論、眞宗、淨土、日蓮諸宗の寺院檀徒等まで

も、自然に臨濟化して居る。殊に眞宗門徒の家までも位牌を安置し、それに靈膳茶菓等を供へ、墓碑に塔婆を建てる杯は、他所では曾て見聞せぬことであるが、是れが臨濟化の結果である。眞宗門徒までが此の通りであるから、その餘は推して知られる。これが果して善いか悪いかは別問題として、兎に角盤珪和尚の感化力の強いことは、實に感服せざるを得ぬ。

四 盤珪和尚と秀益和尚

余は八月十二日大洲町曹洞宗法華寺に於て一場の講演をなしたが、その際にも同町高等女學校校長井音次郎氏が夙に盤珪和尚の道風を欽慕して、その傳説逸事を蒐集せんと、目下頻りに探索中であるといふことを聞いた。十四日五城村曹洞宗高昌寺に至つて、又も盤珪和尚の話より、端なく同寺の住職木村隆法師より、盤珪和尚に關する逸事を聽き得た。これは今回の旅行に於ける掘出物である。その事はかうである。盤珪和尚が曾て如何なる事由であつたか、大洲の如法寺を辭して去られた。その時

高昌寺に立寄つて、當時の住職秀益和尚に暇乞して立ち去られた。その跡へ大洲侯が盤珪和尚の後を追うて來り、秀益和尚に盤珪和尚を連れて歸つてくれるやうにと頼まれて、秀益和尚は早速承諾して、萬一盤珪和尚が歸られなかつたならば、拙僧も再び此の高昌寺へは歸りませぬと誓つて寺を出て、中山といふ處まで赴き、盤珪和尚に面會して、藩侯が高昌寺迄自ら頼みに來られ、又自分も萬一和尚が歸られぬかぎり再び寺へは歸らぬ決心の程を話して、是非共一たび如法寺に歸られたしと切に望まれたので、盤珪和尚もその熱心に感じて直ちに引き返して如法寺に歸られたので、大洲侯は深く之を徳として、高昌寺和尚にその禮として酬ひたいから、望みがあらば何なりとも申出てくれたしといはれ、秀益和尚は別段に望みとはありませぬが、當高昌寺は山が少なく、薪に不自由致すと申されたにより、然らばとて、寺の後の山を拜領仰せつけられたといふことである。これによつて卓龍和尚の代に、特に大洲侯の位牌を製して安置せられ、尙ほ如法寺より問合があつたによつて、卓龍和尚は寺中の文書

を調べて右の趣を書いて送られた。又安永五年、大洲侯百年忌に當り、高昌寺住持が、如法寺に焼香に赴かれたといふ。以上の事實は高昌寺に藏めてある左の古き記録に徴して知ることが出来る。

一、先年 圓明院様御代、如法寺盤珪禪師、故あつて中山迄御歸被成候由、其砌圓明院様直に當山に被遊御出、和尚に御頼に付、其時盤珪禪師御迎として、中山に御出被成候て、早速御承知にて御歸被成候由、萬一御同心無御座時は、當山和尚も直に御出寺の趣被仰置候由、其節御上より當山望之儀御座候者、申上候様被仰出候由、其砌何之望筋も無御座候得共、當寺にては山少く新不自由成由被仰、右に付只今之後山御拜領と申事に御座候。右之譯を以て卓龍和尚代圓明様御位牌者、別に相成申候、近來右之趣、如法寺より御尋之由にて、去る方より聞合に付、卓龍和尚代、當山を調べ合、書附遣申候、安永五丙申年 圓明院様御百年忌に付、當山和尚、如法寺に御焼香に御出遣成候事（當時十世三峯秀益大和尚、但

此世代御名記差遣 候處 此砌 如法寺御計録に入候様致傳承候事

此の記事に據れば、大洲侯が盤珪和尚を崇敬せられて居たことの如何に深厚であるといふことが察せられると同時に、秀益和尚が宗派の異同に拘らず、盤珪和尚に對する友誼に深厚なることも亦察せられる。昔は師道といふものが正しく行はれて、弟子たる者は、絶對に其師たる者を尊敬して、其命令に服し、その教に順じて、自ら之を修行するといふ精神を以て事へたもので、一國の城主たる身を以て一箇の禪僧に對して斯くまで鄭重にする處、誠に感服に堪へぬ。及臨濟の盤珪和尚に對して、曹洞の秀益和尚が、堂々たる大刹をも抛つてまでも、後を追うて連れ歸つたといふ情誼の厚さとは、到底今日の如き人情輕薄な世には斷じて見ることは出来ぬ。古昔禪門の高僧が、今日の如く筆舌を以て喋々嘯々と傳道布教をせなんだのに拘らず、上は王侯大臣より、下は愚夫愚婦に至るまで感化を興へて、その餘徳が幾百年の後に傳はつて盡ぬことは、全く其人格が一世に勝れて居たからであるといふことが知れる。偶々此の事蹟を

探つて深く感ずる所があるので之を記した。(大正五年十月八日)

第二十 英雄の鍛錬

一意志の鍛錬

英雄豪傑が驚天動地の活動をして、絶代の偉業を建てるのは、第一はその人の天才で、第二は時運であることは申すまでもないが、只この二つだけでは、たとひ一時は華かな活動をして、歴史の上に光彩を残すことはあつても、自己の理想を實現して、それが後世まで行はれるといふことは無い。例へば、英傑の天質といふのは、土中の金屬の礦物の如きもので、その本質が何程貴重なものであつても、只土中から掘出したばかりでは、何の用にも立たぬ。その貴重な価値をあらはすには、爐中の烈火に投じ、名匠の鉗鎚により、非常なる鍛錬を受けねばならぬ。古今の英雄にして、其天才も卓出し、又よく時世の風雲に乗じ、一時は拔山瀾海の偉業をあらはしても、中途にして

挫折し、或は自己一代だけは非常の榮華を極めても、身死して屍未だ冷かならざるに、子孫は早く滅亡して、見る影もなく、徒らに後人をして其はかなさを哀ましむるのみなるは、只この第一第二のみあつて、第三の鍛錬が缺けてあるからである。つまり英雄の未成品であるからである。然らば其鍛錬とは何であるかといふに、意志の鍛錬である。英雄は多く智謀に長じ、感情も敏い者で、時勢の變化を看破し、之れに應ずる策略を運らして、自己の志望を達することに勝れて居る。けれども、餘りに感情が激烈であり、又智慧があつて、只目前の利害のみを見て、その利害の爲めに動かされて、意志が變ずるといふと、忽ち失敗して仕舞ふ。英雄の末路哀むべしと、後世の人に歎ぜられるのは、大抵この意志の鍛錬が缺けて居るからである。そこで眞の英雄として、能く絶代の偉業を成し遂げやうとするには、是非とも充分に意志を鍛錬せねばならぬ。

二 我國の現状

維新以來我が國の文明は、非常な速力を以て進歩をなして居るが。それは西洋文明の輸入の爲めてある。ところで、西洋の文明は科學的智識を以て物質を自由にするところが主である。物質的智識の發達は、人類の生活上に於て最も大切で、殊に宇内萬國の競争場裡に立つてゆくには、尤も必要である。けれども只この智識と鋭敏な感情だけては、其活用を誤まつて、自ら苦境に沈むことを免れぬ。今日我國の狀態は、五十年來智識萬能主義の教育の結果、上は廟堂の大臣から、學者、軍人、農工商に至るまで、只目前の小利を競うて奔走し、物質的の榮華を貪ることに汲々として居る。社會の上位に在る者が皆かういふ有様であるから、青年學生達まで之を見習ひ、只榮華の夢にあこがれ、煩悶懊惱の結果、遂に自殺を謀る者が續々輩出するに至つて居るの

は、國家前途の爲めに慨歎の至りに堪へぬ次第である。

三 幕末の英雄

徳川幕府三百年の太平の間、二百六十餘の諸侯、八萬の麾下、皆榮華奢侈に溺れ、

昔日の武士氣質は殆ど消磨して居た時、世界の大勢は自然に移り、尊王討幕、鎖國攘夷等の説が起り、六十餘州は殆ど五里霧中に彷徨するに至つた。是の時に當り、薩長土肥の志士が一致協力して幕府を倒して、王室の中興を企て、遂に維新の大業を立てたのであるが、彼の維新の三傑と稱せらるゝ西郷南洲、大久保甲東、木戸松菊の如きは、其智謀固より一世に卓出して居たに相違ないが、それよりも彼等が意志鞏固にして、感情の冷靜なることが、彼等の成功の大原因であつた。木戸松菊は病死したが、西郷と大久保は共に天壽を全うしなかつた。けれども是れは彼等が自己の所信を遂行した爲めの結果であつて、即ち彼等が意志の鞏固なる所以である。而してこの意志の鞏固は偶然に出來たのではなく、多年非常なる鍛鍊を経た結果である。

四 幕末英雄の參禪

維新中興の大業は、西郷南洲等の力に成つたものであることは、今更申すまでもないが、その西郷は王陽明學に通じ、加ふるに薩摩の無三和尚に就て參禪し、又徳川

の三舟、即ち勝海舟、山岡鐵舟、高橋泥舟等は有名なる參禪居士であることも亦著明であるが、彼の幕末の大老にて、當時の輿論に反抗して、剛愎執拗、專斷壓制の權化とまで稱せられた井伊直弼も亦非常なる佛教信仰家で、殊に當時洞門の名匠たる彦根清涼寺の仙英和尚に參禪して、大悟徹底の境に達して居た人であつたことは、餘り世人に知られて居ないやうである。然るに實際に當時の事情を調べて見れば、彼れの鞏固なる決心と、非常なる活動は、偏へに積年多大の修養から顯れたものであることが知れる。

五 井伊直弼の參禪

大正七年六月三日東京帝國大學山上會議所に於て、大學研究室内印度宗教哲學會の主催によつて、幕末の大老井伊直弼の佛教信仰に關する史料展覽會が開かれ、大隈首相を始め朝野僧俗知名の來會者が甚だ多かつた。陳列品は甲乙丙丁及追加の五種に分けられ、甲は井伊家歴代中寺院に緣故の深い人物の肖像等、乙は井伊家の香華所たる

彦根の清涼寺、武藏の豪徳寺の圖、並に經卷書類等、丙は正しく直弼の佛道修行に關する史料で、丁は直弼の信仰が武術、文學、美術、政治等に顯れたる史料等、追加には直弼が曹洞宗高祖道元禪師、國師號宣下に關して斡旋せられたるに就て、永平寺より紀念として公に贈つた特製の「正法眼藏」等で、合計百七十四點の多きに達して居たが、就中丙號の直弼が參禪に關する書類は最も余等の注目を惹いた。直弼は其の從弟たる攝專師といふが、近江の眞宗福田寺に住職せられて居た因縁から、夙に淨土眞宗の經論を研究し、諸種の騰寫、並に「佛教論」等を著されてあるが、後に當時清涼寺住職なる仙英和尚に就て、熱心に參禪し、遂に和尚の印可を得られたといふ。仙英和尚は、瑩山禪師の「傳光錄」を始めて出版せられた洞上近古の名匠であるが、直弼は和尚を師として參禪の結果、左に録する六轉語の著語の和歌を和尚に呈して、その證明を求められた。

高峯原明禪師六轉語之和歌

侍從藤原直弼花押

大徹底人。元脱生死。依何命根不_レ斷。

わだつみの底にはふちも瀬もなく

水のみなみ常にたえせず

佛祖公案。元一箇道理。依何有_二明與_一不明。

池の面におもはずうつる影なれば

すむもにござるも月のとがしは

大修行人。元可_レ遵_二佛行_一。依_レ何不_レ守_二毘尼_一。

峯の花見つゝ、ぞのぼる一道は

枝折のあとも何にかはせん

杲日當_レ空。無_レ所_レ不_レ照。依_レ何被_レ遮_二却片_一雲。

あやにくに猶_レむら雲のかゝれるは

あきらけき日のあればなりけり

人々有_二箇影子_一。依_レ何踏_二不_レ著。

はかなくも身にそふものと思ふ哉

おもひすつればかけもとまらず

盡大地這箇火坑。得_二什麼_一三昧。不_レ被_二燒却_一。

天地も身もはやともに焼ぬるを

いまさら何かやかれじとする

直弼が藩主となられた後も、この參究を怠らず、幾たびか草稿を改められたもので、始めは半紙の横帳に記して、處々改刪した跡があり、又鼠色の半紙をツギ合して、六轉語を上書き、その下に直線を引き、その線の上に和歌一首づゝを書いたものもある。兎に角非常なる苦心を以て、幾たびか改作して、その上で呈出せられた蹤跡が歴々と見えて居る。かくて仙英和尚は、

井伊侍従公無根水元帥閣下。來書太奇特。嘉青中有參禪超脫之狀。

無根水上活飛龍。挑霧捫雲出九重。意氣自然無畏處。靈幽未許得。

窺窮。

の一偈を贈り、且つ袈裟、血脈等を授けて、印可證明を與へられたといふ。直弼は是れより先き國勢の變動あることを虞れて、安政元年四十歳の時神社に鎮護國家の祈禱を頼まれたが、その祈禱を依頼する書簡の中に、自分が大老に任ぜらるゝ様子があるが、自分は未だ確固たる施政の方針も立つて居らぬから、今大命を拜しては大に當惑致す次第であるによつて、何卒大命の下らぬやうに祈禱を致してくれといふ旨意が認められてあつた。又安政二年武士の覺悟を定め、自ら戒名を作り、寺僧に托して位牌を作らしめられた書類、水戸の徳川慶篤公より、直弼に對し、萬一の變あらんことを警戒せられた書狀等があつた。是等の書類に徴すれば、直弼は自ら進んで大老となられたのではなく、已むを得ずして大命を拜せられたことが分る。又已に大命を拜せられて

からは、斷乎として自己の方針を遂行して、毫も動搖せず、一身の危害を顧ず、勇往邁進せられた決心の鞏固なることが察せられる。猶ほ當時京都に派遣せられて居た老中某に贈られた書狀中に、此度の事は天下の興亡に關する重大なる事件であるから、主上の思召は恐れ多いことであるけれども、天下の大事にかへられぬ故に、たとひ主上の思召に背くことがあつても、方針を變へてはならぬと策勵した旨意があつた、又特に時事に慷慨し詠まれた、
春淺み野中の清水氷居て

そこのこゝろを汲む人ぞなき

の一首の如きは、直弼の孤忠が世人に知れぬので、世間から種々の惡評を立てられて居るといふことを歎かれた、苦心の程が察せられ、思はず感涙を催うした。直弼は政治の外、茶道、插花に精通し、文學美術等に達して居られて、その遺物が甚だ多いが、その思想が一々禪道より出て居ることが明かに顯はれて居る。

余等は幼少より薩長並水戸等の人の手に成つた書物のみを讀んで居たので、井伊大老は單に非常な剛愎執拗なる壓制家であると思つて居た。然るに先年鷲尾順敬氏が『佛教史學』に直弼の日記を載せられたを見て、始めて非常なる佛教信家であつたことを知り、これまでの考が大に誤まつて居つたことを自知したが、此度の展覽會に陳列してあつた書類を覽て、一層深く感じた。直弼の修養は幼少の頃から行はれ、殊に仙英和尚の提撕を受けて參禪の結果、遂に生死透脱の境界に達して居られたから、當時薩長水戸等の志士を始め、天下一般の群議を排し、即ち鎖國攘夷の説に反對し、自ら一命を擲つて開港貿易の事を斷行せられたものであるといふことが分かつた。勿論直弼が當時に於ける處置に就ては、暴虐殘酷な事も多くあつたけれども、それは當時の勢已むを得ぬことで、恐らくは直弼自身にも承知して居られたこともあらうが、天下の一大事にはかへられぬから、承知しながら忍んで行はれたかも知れぬ。兎に角宇内の大勢を觀破し、群議を排し、萬人の怨を一身に引受け、鬼神をも

挫く勇氣を以て、自己の所信を斷行して、國家を累卵の危きより救うて、泰山の安きに置かれた、その意志の鞏固なることは、誠に絶代の英雄と謂はねばならぬ。

維新の當時勤王黨の大將たる西郷南洲、佐幕黨の首領たる井伊直弼、勝海舟、山岡鐵舟等、その行動は各相異なつて居たけれども、共に參禪につて、其身心を鍛鍊し、死生超脱の境に達して、能く一身を君國に捧げて偉業を成したことは同一である。さすれば維新の大業は全く參禪的偉人の手に成つたと謂うてよい。今や舉世浴々として薄志弱行の徒になりつゝある折柄、偶井伊直弼遺物の展覽會を觀て、切に感ずる所があつたので之を世に紹介し、併せて卑懷を陳べた次第である。(大正七年七月八日)

第二十一 勉強と趣味

一 勉強の意義

「好きこそ物の上手なれ」とは、一分の眞理であつて、特殊の場合にのみいふべき語

である。「事は勉強に在り」とは、漢の董仲舒のいうた語で、何事でも精を出し骨を折つてそれを爲しつゞけてゆけば、必ず成就するものであるといふ意である。然るに近頃では、この勉強といふことを誤つて、只學問の事と思ひ、彼れは商賣は好きであるが、勉強は嫌ひであるとか、彼れは小供の時から、晝をかくのが好きで、勉強は嫌ひであつたとか、というて居る者が多い。一文不知の愚夫愚婦ならばイザ知らず、苟も文字を解して居る者は、這樣な間違は無かりさうに思はれる、トコロが立派な紳士でもこの間違を正當と認めて居て、却つて他人の正當に用ひて居るのを間違だと思つて、窃に笑つて居る輩がある。一體に近頃は文字の意義を正當に解せず、或は狼りに熟語を作つて、滅茶苦茶に使うて居る者が多いけれども、この勉強の如きは、多數の人が各自知らず、誤つて居るやうである。

サテ人間にかぎらず、動物でも何んでも、初めは只飲食等の慾ばかりを追ひ求めて居るもので、その外の事は總べて習慣であつて、その習慣から智識欲を生じ、それが

次第に發達して種々の新發明等をなすに至るので、決して此の人は新發明をする者、彼の人は眞似をする者といふやうに、最初から定められて生れて來る者は無い。往々天才といふ除外例の人物もあるけれども、是れは千百萬の中の「數トリ」に過ぎないので、一般多數は、最初は他人の仕事を眞似る、之を學問修業といふ。その學問修業といふものは、小兒幼童が初から好きになつたのではないけれども、父兄等が之を勧め、學校に上つて教師に教へられ、或は他人が智識の進歩するのを見て、自分もその通になりたいといふ志を起して、自ら奮發して學問をする者もある。要するに勉強といふは精力の有らん限りを盡くして行ふことで、「中庸」に「勉強して之を行ふ」とある語によつても、その意義が明かである。しかるに之を單に學問に精を出して怠らぬことばかりにいふのは誤りである。

人は生れながらに知るものではなく、必ず先進の蹤を學んで、はじめて覺知するもので、而もその覺知した處を自ら幾度もくりかへして、即ち復習を怠らずして後に漸く

自分の意の如く自由に行れるやうになる。それまでには倦怠が生じて、中途で廢めやうと思ふことも幾度もある。たとひ其れほどでなくとも、飲食娛樂に耽つて樂んで居るのは面白く、學問修業を勉強するのは辛いものであるから、マゝ今日は寒いから休んで遊ばふ、今日は暑いから休んでおけと、怠け出すと、それが習慣となり、後には全く廢して仕舞ふことになる。この時にそんな弱い心ではならぬと奮起して、自ら勉め自ら勵んで之を行ふ、これが即ち勉強である。その勉強をしてゆく中に、自然にその事に面白味が出来て、是れまで苦しく、辛いと思つて居たことを忘れて、我れから進んで之を行ふやうになる、之を趣味といふ。一たび趣味を感じて来るやうになれば、勉強ではなくなり、一の娛樂となつて、今度は眠いのも忘れ、腹のすいたのも忘れて、一生懸命に之を行ふやうになる。斯る趣味を感じて、多年その事を打ち續けてゆけば必ずその奥妙を悟る。之を名人とか大家とかいふ。然るに世人往々名人、大家を見て、彼れは天才である。彼れはその趣味を有つて居る、それで上手に出来るのである。

るが、我れはその天才もなく、又趣味を有つて居らぬから、どうしても出来ぬと云つて、自ら奮つて學ばうとせぬ者がある。

二 抹茶の稽古

余は十九歳の時、師匠から東京に遊學することを許され、遠からず發足することになつた。その時師匠がいふには、東京に行けば、自然禪師僧正方の給仕をつとめることもあらう、その時茶碗の持ちやうも知らぬやうでは面目を失する次第である。老僧は少かい時に習はなんだので、汝に教へることが出来ぬが、清水寺の蓮乘院山村圓忍上人は、三齋流茶道の老匠であるから、少しの間彼處に行きて、ザツトなりとも茶道の一斑を習うて来るがよいと云はれた。トコロで薄茶は苦いので大嫌ひである。余はチョット困つた、イヤそんな事はなくてもよいとは云はれぬから、左様でもありませんが、最早出發に日もありませんから、又他日の事に致しませうといへば、師匠は、イヤ既に山村僧正に頼み込み、稽古用の薄茶も買うて來たから、明日でも下男に飯米

を背負せて連れて行けばよいとのこと。この一言に余は師匠の慈念の深きことを感
 じた、師匠は酒こそ大好物で、朝からでも、徹夜でも辭せずして鯨飲せられ、茶とい
 ふものは、番茶の外は決して喫まず、菓子類は一切口にせぬ身でありながら、弟子た
 る余には他國に出て耻を搔かせまいとの心より、斯くまでに親切に勧められるものを、
 自分に嫌ひてあればとて、どうして辭退が出来やうと思ひ、それでは稽古に参ります
 と、翌日下男を連れて蓮乗院へ行つた、山村僧正は誠に親切な老宿であつて、早速茶
 室に誘ひ、毎日三回即ち朝は僧正自ら手前をなし、午後は弟子、夜間は余といふ順序
 にて三回九日間に炭手前から、平手前、臺子手前まで一通を教授せられた。サテ最初
 から好かぬ事を、強ひて勉めて習ふのであるから、余の苦しいこと、辛いこと甚し
 い。山村僧正はそれを察してか、毎日種々の馳走して余を饗應せられた。僧正の親切
 に對しても中途で廢めることもならずして、眞に勉強して習ふ中に、七日目あたりか
 ら少しづつ、面白味を感じ、茶の苦い中に自ら旨味のあることを知つて來た。そこで

種々の秘傳書なども借り出して寫しなどして、兎に角一通形丈は習うて歸つた。し
 かるに東京に來て見れば、何の抹茶どころか、煎茶も碌なものを飲めぬ寄宿舎生活、
 三年の間にスツカリ元の黙阿彌となつたが。郷里の出雲か松平不昧公の地領とて、茶
 道はなかく盛に行はれて居るので、歸郷後は朱に交れば赤くなるで、茶席に出る、
 茶に接する機会が多いところから、益々茶の趣味を解し、今日では點茶の法式は悉
 く忘却して仕舞つたが、自然に熟練して、只茶を點ることだけならば、一人前出來る
 やうになつた。

三 鬚 剃

又古來禪宗では剃髮をするには、衆僧互に手代りに剃り合をしたものである。それ
 は剃髮ばかりではなく、灸を据ることなども皆さうであるが、余はこの剃髮の出來ぬ
 爲めに、到る處に於て非常に困つた。他人の手を勞して自分の剃髮をして貰ふが、自
 分は他人の剃髮をすることが出來ぬから、その人に對して、書物の素讀を教へるか

ら、その代りに剃髪をしてくれとか、詩文を添削してやるからとか、寫本をしてやるからとか、按摩をしてやるからとか、種々の事をして遣つて、それでヤット剃髪をして貰つたものである。勿論今日の學生の如く理髪店に行つて剃せるといふことは許されなかつたので、余の苦痛は容易でなかつた。曾て一冬結制の際に二兩度剃刀を執つて、他人の頭に臨んだことがあつたけれども、一度に二十ヶ處も三十ヶ處も、引つかけ、満頭血だらけにして仕舞つた。それで自分は到底剃刀は使ふことは出来ぬ者と断念めて仕舞つて居た。

然るに明治卅五年頃、一時は行者が居ないことがあつて、理髪店に往かねばならぬやうになつた。ところが能く流行る店では、常に二人や三人の先客があり、その終るのを待つ時間が長いので、一度の剃髪に二時間、間が悪ければ三時間も掛ることがある。そこで不圖自分の手で髪や鬚を剃る人が、世間には多くある。余も手は二本あるから、剃刀が執れぬことはあるまい、頭髮は暫く措いて、鬚だけ位は剃れる筈だ。ヨ

シ少しは傷いても自分の顔であるから、自分さへ痛いのを我慢すればよい。他人に迷惑をかけるのではなく、自分一人だけのことであるから、兎に角試みやうといふ氣になり、多年の間一生手に執るまいと思ひ定めて居た剃刀を手にして、砥石にかけて磨いだが、刃がツイたかツカヌかすら分からなかつたけれども、ヨイ加減にして顔にアテて剃つて見た。トコロが案外スルリと一寸ばかりスレた、これならばと勇氣がついて剃り續けたが、果してソココ、引つかけ、十ヶ處ばかり血を出したが、一時間もかゝつて、漸く粗鬚丈は剃り落した、ソコデたとひ傷がついても痛くても、兎に角自分の鬚を自分で剃り落したのである、生れて以來始めての仕事をしたのである、恰も昔時の武士が初陣に苦戦して、敵の首級を取つた時が、かやうであつたらうと思つた。それから時々剃刀を執つてゆく中に、自然に面白味が出来、後には却て一種の快味を感じつゝ、鬚を剃るやうになつた。然るに元來余の鬚は非常に硬くして且つ濃いところから、日本製の剃刀では剃り悪くなつて來たので、暫時手剃は廢めて居たが、一

日理髮店で、一人の客が西洋剃刀を註文するのを聞いて居て、自分もそれを註文して使用法を聞き、そして試めして見ると、初めは日本剃刀とは違ふので、少しは引かけもしたが、既に數年前から手剃に趣味を感じて居たのであるから、勉強して使うて居る中に、次第に草砥の磨き方も知れて來、漸く傷もせぬやうになり、今日では鬚丈は造作なくスツパリと剃ることが出来るやうになつた。

抹茶も初めは苦くて堪へられぬほど嫌ひであつたが、勉強して習ふ中に、茶味の妙を感じて、今日では一種の娛樂となつた。剃刀も一生使へぬと斷念して居たのが、不圖した考から自ら試めし、途中幾多の辛苦を忍んで勉強してゆく中に、自然に趣味を感じ、今日では亦一種の娛樂となつた。これは斯様な事ばかりではなく、世間萬般の事は皆同様であると思ふ。

現代の學士、博士といふ連中や、政治家、商業家、軍人、醫士等の中にも、その職業に對して自ら趣味を有して居ない者が往々ある。彼等はその職業より得る所の報酬

を得るを目的として居る。それであるから其目的即ち金錢、利慾が得られるといふことになれば、如何にその職業をせめても辭せぬ、學者はその學問を賣り、政治家は個人の利益の爲めに、國家問題を犠牲に供し、商業家は買占、賣惜、その他種々の詐欺的行爲を敢てし、軍人は賄賂を取り、醫士が疾病を外にして、患者から不當の金錢を要求することがあるのみならず、無免許のモグリ醫者が時々檢舉せられる。彼等にはその職業に興味を感じないから、斯様な事になるのであるが、この傾向は獨り現代壯年者、先進者にあるばかりでなく、青年一般に此の惡風に感染して居るやうである。

四 現代青年の弱點

現代の青年が、その職業を選ぶに當つて、自己の腦力と其嗜好とによらず、今は工業が盛んであるから工を修める。今は貿易が盛んであるから。外國語を修める、イヤ法律、イヤ政治、曰く陸軍、曰く海軍、曰く某、曰く某と、只その時の勢につれて自分の職業を定めてゆく、それであるから修學中その學科に深い趣味を有たず、イヤ

くながら一定の年限間之を修めて、漸く卒業して一の職業に就けば、それで立身出世を謀るのみである。恰も藝娼妓が、顧客の老少尊卑を問はず、金にさへなれば誰れでも厭はず、媚を献じ情を賣るやうなものである。その姿容が異なつて居るだけで、その心事は同一である。否、藝娼妓は媚を献ずるのが、彼等の職業であるから、深く谷むるに足らぬけれども、その他の者は職業を真正に勤めるのではなく、之を汚す者と謂はなければならぬ。

昨今は青年學生が新に専門、高等學校に試験を受けて入學する時期であるが、彼等青年の云ふ所を聞けば、高等商業學校で失敗すれば、高等工業學校に入る、工業學校に入らなければ法律學校、兵學校、士官學校、商船學校、何處でも構はぬ、入學の出来る處に入るといふ。或は初めから二校、三校へ入學願書を出して置く者がある。是れは豫め甲乙丙と轉じて入學試験を受ける覺悟である。軍人と商業、法律と醫士、皆その性質が違ふ。その違ふ職業を一人て修めやうとするのであれば、初めから修學

の志が確立して居らぬ。斯様のことは修學中に自ら趣味を感じ、一生その職業で遣り通すといふ心は起らぬ。その薄い志で修めた學業を以て世に立つのであるから、目前に金錢利慾が顯れば、忽ち瞑眩して顛倒り、之れが爲めに國を誤り身を喪ふやうなことになるも寧ろ當然である。

それであるから勉強と趣味といふことが肝要である。即ち初は勉強して遣つて居る中に趣味を感じて来る。この趣味が出来たれば更に勉強して、益を向上發達せしめてゆけば、その職業が面白く、それを勤めるのが何よりも愉快で、如何なる利慾を以て誘ふも、その楽しみに換へられぬやうになる。世間の人皆斯様になれば自然に收賄等の腐敗は一洗し去ることが出来る。(大正七年四月八日)

第二十二 活 動

一、天地は大活動物である

天地は一大活動物である。吾々が棲んで居る此の地球が日々夜々回轉して、幾千萬年といふことを知らぬ長い間、曾て休息したことのないのは、今更云ふまでも無いが、太陽も常に活動し、その他の無数の星も皆同じく永久に運動して、暫時も怠つたことは無い。富士山は東海の表に屹立して、萬古泰然として動かず、東海は日夜波瀾を起して活動して居るといふは、吾々人間の凡眼から見た話であつて、決して天地の真相を見破つた語ては無い。若し活眼を開いて見れば、富士山それ自身は時々刻々に活動して、一セコンドと雖も未だ曾て休んだことは無い。山岳の活動といふは、火を噴いて居るから活火山で、火を噴いて居ないから死火山といふやうな理由では無い、只だ山や川ばかりではない、草木土石、いかなる頑冥不靈と見える物體でも、此の天地間に活動して居ないものは一も無い。

酸素や水素のやうなものは、情感の無いものゝやうに見えるけれども、或る分量であれば、互に和合する働がある、又互に反撥する働もある。ラヂウムなどは僅か

の分量で非常の力を出す、さうしてそれが殆ど永遠に繼續する。石や瓦の如きは、少しも働かぬと思はれるが、それは積極的に現はれぬだけであつて、若し他の物が之れに觸れば忽ち破れる處を見れば、矢張その中に活動を貯へて居るものと見ねばならぬ。イヤ全體物の動靜といふことは、二つの物を比較しての見方で、例へば、川の水は日夜絶えずに流れて居るが、その水の上に懸つて居る橋は常に住まつて居ること、水は動いて居るが、橋は動かぬと見るのは、即ち水と橋とを比較した上の相場である。若しそれ橋その物に就て見れば、その中に活動して居る處がある。その理を達観するには、通常の俗眼の見解を打破してかゝらねばならぬ、それ故に古人は、特に「橋は流れて水は流れず」と云うこともある。この宇宙觀よりすれば、天地萬物悉く活動的であることが解かる。古から天地人の三才の中に、人は最も靈なりと云ひ、現代に於ても、人は高等動物なりと稱して居る、さるからには人間は活動すべきものであるといふことは明かである、即ち働くことは人間の本然である。

二 東洋各國は活動を卑しむ

然るに古來印度、支那、朝鮮、日本等では、身分の尊い者は、なるべく自ら働かぬやうに致して居る。衣服を着るにも他人に着せて貰ひ、食事をするにも他人に給仕をして貰ひ、寝るにも臥具は他人に敷ひて貰ひ、室内の掃除は勿論、足袋も、下駄も、傘もみな他人の世話になる、只自ら食物を口の中で咀嚼すると、便所に行つた時にも、他人の力を假らぬだけで、その外は一切他人の手を煩はす、これ等の人は自ら働くのは、甚だ卑しむべきことで、自ら働かぬ者ほど尊いやうに思つて居るので、これは甚だ誤つたことであるが、支那人、朝鮮人などは特にさう思つて居る。その證據には、支那の上流の人、富豪の輩は、兩手の指の爪を出来るだけ長くして居る、それは労働をせぬといふ徴として、自ら之を誇り示して居り、又他人も之を見て羨んで居る。朝鮮でも矢張り傾向がある。イヤ日本でも婦人がゾロリ、ベツタリと長い袖や、長い裳を引きずつて居るのは、一は優美に見えるといふこともあるが、一は矢張り

この労働せぬといふことを、他人に示して誇つて居る傾向である。西洋人は全く反對で、上流社會の人でも、富豪の輩でも、自分の身の圍りの事は、大抵自身で爲ることは勿論、形體で働くか、精神で働くか、いづれかに於いて働いて、決して仕事なしに、ブラ／＼と遊び暮して居るものは無い、要するに概して彼等は活動的人種である。

三 日本現今の活動は妄動が多い

西洋の文物が日本に入つてから、日本人も從來の誤りを覺つて、近來頻りに活動といふことを叫ぶやうになつて來た。これは甚だ結構であるけれども、未だ活動の眞意を解せぬ者が多いやうである。現今の人は、勉強とか、活動とかいふことは、徒らに身を勞し、心を勞して、名譽を得、利益を獲やうと、朝から晩まで、汲々として少しも落付かぬ、恰も白鼠が輪を廻し、狂蝶が飛び廻るやうに、騒動狂奔する事と思つて居る。これは活動では無く、妄動、狂奔といふものである。この妄動、狂奔の結果、一時は學術を研究して、名譽を博した者や、多年の辛苦によつて多額の財産を作り出

した富豪が、僅かの事件から失敗して、煩悶懊惱して遂に自殺する者が頻りに輩出する、丁度蛾が火の近くに來て、ハネ廻つた揚句に焼死ぬやうなもので、その愚實に憐むべきである。

四 動的修養と靜的修養

近頃ある一類の間には修養といふことが唱へられて、種々の事が行はれて居るけれども、未だ要領を得て居ないやうである。眞の活動をするには活動の反對なる寂靜といふことを解せねばならぬ。即ち身も心も大に活動をするには、大に寂靜の修養を積み重ねばならぬ。此の修養の無い者は、偶々好運に乗じて、一時の成功を得ても、又忽ちに失敗することを免れぬ。これは自然の理數である。皇子傅育官長の三好愛吉氏が、曾て仙臺の高等學校教頭で居られた時、余が演説の爲めに仙臺へ行つた際に、余に話されたことがある。それはかうである。修養は靜的と動的と兩方に涉つて致さねばならぬ。自分は一夏越前の永平寺の僧堂に入つて坐禪をして、精神の鍛鍊をなし、

即ち不動心の境を得た。又曾て一夏は軍隊に入つて、兵營生活を試み、身體を鍛鍊した。かく夏期休暇を利用して、靜的修養と、動的修養を試みたが、共に大に得る所があつたと云はれた。氏の如きは眞に活動の眞意義を解し、又よく修養の法を得たものと謂うてよい。

余が徒弟の中にも、生來虛弱で、小學から中學、専門學校を卒業するまでの間は、常に病氣に罹つて、三度の食事さへも人並に出來ず、粥やパン杯を食ひ、僅かに卒業した者があつた。然るに先年一年志願兵として、兵營生活を致してから打つて變つた強健の身體となり、目下全身鐵の如くて、随つて精神も壯快で、毎日曜には雨天で無い時は、必ず七八里徒歩旅行を致して居るといふ。余も近く數年來、身體の攝養に注意して、讀書起稿等の時間を減じ、坐禪工夫の時間を増すやうに致したれば、體量が貫目も増して、益す精神の壯快を覺えるやうになつた。

五 大なる活動は大なる靜的修養を要す

世界の大戦未だ熄まず、この後ますます我が國民の活動を要すること甚だ切なりと謂はねばならぬ。然るに近來我が國民の體力が衰へゆく傾向があるというて、頻りに青年體力の強健を奨励して居るやうである。これは固より必要に相違無いことであるが、而も活動の主體たる精神不動の修養を怠らぬやうに致さねばならぬ。要するに徒らに妄動狂奔に陥らず、眞の大活動をなすには、是非とも大に寂靜的修養を積むことが必要である。(大正七年六月八日)

第二十三 腹 の 人

一 腹 と 頭

昔の人は、人の伶俐、不伶俐の相違することに就て、今の人とは考が異つて居つたらしい。勿論伶俐と不伶俐とは、智慧の有無によつて區別せられてあつたことは、今日と同じであるが、その智慧といふことに就いても、考へ方が違つたけれども、そ

れよりも智慧の在る處に就いての考が全く違つて居つたらしい。「方寸の中に在り」などといふ語があつて、胸の一寸四方ばかりの處に心があつて、その心が智慧の働きをするものと考へられてあつた。それ故に「寸心」といふ語もある。今日謂ふ心臓といふものと、胸中の心といふことが、殆ど同じやうに思はれて居て「赤心」又は「丹心」といふことも、矢張腹の中にあるものとしてあつたらしい。それであるから、人の伶俐なことを、彼れは顔面は兎も角も、胸の中は勝れて居るとか「胸算用」が速いとか「腹が善い人」であるとか、或は「口は甘い、腹の黒い人」であるといふ語がある。兎に角人の善惡智慧利鈍等は、すべて其人の腹の中に在るものと考へられた。又「呑み込みがよ」とか、或は「腑に落ちぬ」といふ語もある。然るに現今の人は、智慧利鈍の區別は、その人の頭腦に在るといふ。昔より少しく位置が上の方に進んだのである。これは昔より人間の智慧が進んだので、身體の解剖、生理の研究等が緻密になつて来て、人間の胸や腹は、身體の活動する本原、即ち原動力の在る處では

あるが、精神の存在する處ではない。智情意等即ち心的作用を起す處は、人の身體の頂上、すなはち腦髓に在ると致して居る。それ故に憐れの人を「彼れは頭腦がよい」とか、或は「彼れは頭腦が明晰である」とか、或は「彼れは腦味噌が足らぬ」とか、若くは「彼の腦味噌は腐つて居る」とか云うて、人の相場は頭腦によつて定められるといふ有様である、これは一寸考へても、昔の人の考へは粗末であつて、今時の説が正しいといふことが分る、昔の人は多く想像で推定するが、今日の人は悉く實驗に基いて觀察するのであるから、どうしてもその觀察が誤りなく、多くの點に於て正確である、それ故に精神作用は胸や腹から起るのではなく、腦髓より生ずるといふ説が正當であらう。

二 肉體と精神

人の身體は精神の肉體との二つから出来て居るのであるから、精神の作用によつて、肉體を變化することは勿論であるが、肉體の力によつて、精神に影響を與ふるこ

とも、亦事實である。「健全なる智識は、健全なる身體に宿る」といふ西洋の格言も、この理より出来て居る。しからば頭腦が健全で無ければ、健全なる精神作用が起らぬといふ理も亦明かである。然るに現今は衛生々々と八釜しく云ふにも拘らず、壯年、青年の人々に神經衰弱の病に罹る者も非常に多く、且つその神經衰弱が甚しくなつて、精神病になる者も亦頗る多い。これは餘りに智識といふものを重じ過ぎ、狼りに腦髓を働かし、即ち精神の過勞から起つて來ることである。この精神の過勞は遂に生命を失ふに至ることがあるから、衛生、攝生、健康、運動と八釜しく云つて、頻りに身體の強壯を計り、衣食住の奢侈を極めて、物質的の快樂を盡くしたいと望みながら、その快樂を受くる主體なる身體その物を亡くして仕舞ふことになつては、何の爲めにアセリ、モガクのか、甚だ解からぬことになる。蓋しこれは現代に於ける謂はゆる文明なるもの、弊害である。

三 漢の三傑

支那の漢の高祖といふは、楚の項羽といふ猛將と共に、秦の始皇帝といふを打ち滅して、遂に天下を取つた絶代の英主であるが、それは張良、陳平といふ智謀に長けた人、蕭參といふ經濟の上手、韓信といふ實地戰爭に長けた名將が居て、高祖を輔け、高祖はこの三人を自分の股肱腹心として、巧みに之を使用してゆかれたからこそ、千古の猛將たる項羽をも打ち亡して、秦の天下を掌握せられたのである。若し只智謀に長けた張良陳平等のみを尊重して、他の二人を用ひなかつたならば、斷じて天下を取ることは出来なだに相違ない。漢の高祖は天下を取るに當つて、常に智謀の臣ばかりを重く用うるといふことを致さなかつたのみならず、自分の死後に於てその子孫が天下を失はぬやうに維持してゆくといふに就いては深く用心する所があつて、周勃といふ沈重寡言、温厚着實なる人を見立て、彼れは智謀才略は無いけれども、その人格が確乎として居て、物事に動されず、威望あつて、衆多の人を歸服せしめるに足るだけの力量があるといふので、自分が死後萬一の變があつた時には、天下の重任を背負

つて立ち、他人に奪い取られることの無いやうに致す者は、周勃一人であるといふて居られたが、高祖の死後果して、内亂があつたけれども、その辭の通りに、周勃が能く之を治めて仕舞つた。張良、陳平等は智謀の士即ち今日の所謂頭の人で、周勃は威望の士即ち今日の所謂腹の人である、漢の高祖は、斯く種々の英傑を重用して、天下の後世に傳へることを得たのである。然るに現代は何れも只頭腦々々と、頭腦ばかり尊重して、胸腹を顧みない傾向がある。

四 個人と國家

二個人の身體に比べて見ても、その不都合なることが解かる。如何に頭腦が大切にありとも、頭腦ばかり馬鹿に大きく、胸や腹が小さくなつたならば、頭腦の重かたで全體の平均を失ひ、ヒヨロ／＼して、一寸した事に出逢うても、直ちに倒れて仕舞ふ。現代我國の伶俐者と稱せられる輩には、此種の人物が多くて困る。一箇の身體として斯様の人が居たならば、畸形兒として衆人の嘲笑となるに相違無いが、幸に

無形の事だから人の目に立たぬだけである。しかし無形の害は、有形のそれよりも更に甚しいものがある。一個人に就いても斯様であるが、それが國家を支配する人々の上になつたならば、即ち斯様な畸形兒的な人物によつて、國家が支配せられるならば、その國家は非常な苦痛、損害を蒙らなければならぬ。

五 明治維新の三傑

明治維新の三傑中、木戸松菊は智謀才略、大久保甲東は剛毅果決の士であつたが、西郷南洲は眞に膽力威望の人であつた。この三人が一致して、各その長處を發揮して行つたから、維新の大業も程なく出來たのである。然るに今日は果して如何であるか、徒らに社會各種の人々小刀細工に心を勞して、一時の成功を望んで居るやうであるは、如何にも憤慨に堪へぬことである。

六 俳優の三傑

明治年代に於ける俳優の三傑とは、尾上菊五郎、市川左團次、市川團十郎の三人で

あるといふ、この三人は各その長處が有つて、その比較は容易なことではないが、團十郎のは腹藝であるといふ。腹藝といふ語は極めて俗であるけれども、彼れには微妙といふ處は無かつたが、如何にも重もくしい威望があつた。これが一代に卓絶した處である。今日の藝人輩が如何に頭腦がヨクても腹の力が無い、何となく重みが無い。

七 戦争の譬喻

イヤ藝人ばかりでは無く、學士、軍人、商人、總べて皆々の畸形的人物が多いやうである。相撲取は、常に腹の力が足らねば勝てぬといふ。如何にも上等の力士は皆腹がフレテ居る。彼れは全身の力を腹に集めて戦闘にかゝる。彼等を見ても腹の力を充たすの必要なることを知るべきである。イヤ吾人が寒暑、苦痛、悲ひべき事、怒るべき境に逢つた時でも、ジツト腹に力を入れれば、慥に忍耐することが出来る、一時の感覺さへ斯様である。況して日用怠らず腹の修養を積んでゆけば、如何なる事、如何なる

境に臨むも、曾て顛倒迷惑することは無い。兎に角現代は頭腦を過重して、胸腹を忘れて居る。恰も戦争の時に、參謀官や、實戰將校のみを尊重して、兵站部の必要を忘却して居るやうなものであるから、余は將に腹の修養を勧める次第である。(大正七年七月八日)

第二十四 心行平直

一世法と佛法

佛法は世間の法とは全く異なつたもの、世間の法は、現世の生活上の事で、佛法は現世の生活を離れた、未來の事であると思ひ、壯年多用の間は、佛法の事杯は聽いて居る暇が無いから、世間に立つて活動することが出来なくなつたならば、その時に少しづつども聽問して見たい、といふやうな言ひぐさは、往々聞くことであるが、これは甚だ間違つた考である。しかし俗人の方はかりてはなく、僧侶その人でも、佛法と世法と全く異つて居ると思ひ、その世人と異なつて言行を特に難有いこととして、之

を誇り稱へて居る者がある。

二 靈驗奇特

第一、佛法の尊いのは、佛法を信ずれば、靈驗奇特を得られるといふことであるといふ。その靈驗奇特といふは、人間業では到底出来ないことが、佛菩薩の力で出来る、即ち醫者や藥や、その他有らゆる方法でも癒らぬ病氣も、佛法の力で全快するとか、或は危い災難に出逢うて、他の者は悉く死んでも、一人だけは助かつて命拾ひをするとか、或は貧乏で食ふこともならぬ者でも、忽ち金儲けが出来て、安樂に生計を立て、ゆけるやうになるとか、或は不意に高位高官となるとか、總べて人間業の事柄が、人間業によらずして、佛法すなはち佛菩薩の力で作し得られると思つて居る者がある。これは信仰より功德といふものを誤解して、無形の信仰力で、直ちに有形物質的欲望が得られると思ひ、殆ど金錢を以て品物を買ひ得ると同様に思つて居るので、甚しい凡俗の誤解である。

三 禪道の謬解

第二、凡俗の謬解はなくとも、佛法といふものは、普通世間の人と異なつた事をする者である。一種風變りの生活をするものであると思つて居る者が多い。特に禪道を修する者、即ち禪宗の僧侶はトリわけて奇矯飄逸の風采、舉動をなすべき者と思つて、故らにさういふ風を装うて、俗人の目をひくやうに勤めて居る僧侶が古から多い。勿論禪宗は他の宗派と異つて、一定の經論を立て、その解釋や、儀式杯を固執して居らぬ。謂はゆる經論の文句、戒律の規則に拘泥はせぬ、極めて自由な、極めて磊落な宗旨であるから、自然に普通の人間と違つた、異容奇行をすることになり易いのである。しかし只是れだけが禪僧の資格ではない。然るに世間一般の人は、多く好奇心から一種風變りの物を好む傾きがあつて、禪宗といへば直に變つた言をいひ、禪僧といへば、直に一休和尚や、桃水和尚のやうな事をする者と思ふ。

四 一休の飄逸

一休和尚が一生の間、當時の禪師僧正と稱せられた高僧達と異なつて、正月元旦に京都市中を骸骨を竿の頭にク、リつて振りまはし、「御用心〜」と叫んで歩いたり、關の地藏の頭に小便を流しかけ、擯鼻禪を地藏の頭にヒツかけて、地藏の開眼をしたといふやうな事は、如何にも飄逸な行爲であるが、それは大いに深意のあることで、世人一般の迷信を警醒したので、丁度支那の丹霞天然和尚が、嚴寒の夜、木佛を焼いて、自分の臂を暖めたと同じで、その飄逸な處に一種の妙趣がある。

五 桃水の奇行

桃水和尚が、京都の安井門前で、乞食の群れの中に入りまじつて居られたのを、その弟子が見つけて、和尚ともに苦行をしたいと願つたのを、和尚は之を許されなかつた、けれども、強いて願ふので、已むなく召しつたて行く中、路傍で乞食の死んだのに出逢ひ、和尚はその死骸を取りかたづけ、地を掘つて之を埋め、その乞食が喰ひのこした物があつたので、和尚は取つて喰ひ、弟子に向つて、その方も喰へよといはれ、

弟子は強いて喰うたれば、そのいやらしい臭ひに堪へかねて吐き出した、和尚は之を見て、それだから其方等は吾の境界になれぬのだというて、遂にかの弟子を逐ひかへされたといふ。桃水和尚が天津の驛に杵を買つて居られた時、或る人が天津繪の彌陀の像を與へたれば、和尚はこれを小屋の中に掛けて、炭でその上に、

せまけれど宿はかすぞや阿彌陀どの

後世をたのむとおぼしめすなよ

との一首を書いて置かれた。和尚の弟子密禪といふが、關東に行くとき、轎に乗つて通りかゝり、馬丁が杵を買ふ爲めに、和尚のこの風を見て、轎の中より飛び出して、和尚の手を把つて、さめくと泣いた。スルト和尚はニコリと笑ひ、一偈を作つて示し、且つ、くれぐれも大名杯に親しみ近づくなど誠めて別れたといふ。

桃水和尚の生涯は實に奇矯である、が、これは當時の僧侶が徒らに大名等の歸依により、名藍大刹に任して、華美の生活を誇つて居る者が多くあつたので、特に這樣的

行をせられたので、即ち當時禪僧の弊風を矯め直さうとの意から出たものと思はれる。一休和尚でも、桃水和尚でも徒らに異風奇行を顯して、凡俗の耳目を驚かし、これによつて自己の利名を得やうといふ野心は毛頭も無い。否、名利の念は全く無いから、その行爲の裡表の相違がない。内外玲瓏にして、始終一貫して居る。若しそれ等の外面だけを學んで、故らに他の耳目をひくやうな行爲をするならば、謂ゆる賣僧となつて仕舞ふ。

六 禪僧の臨終

日用の生活状態は凡俗と同じやうでもよいとして、臨終の一事は通常の人とは何か異なつた處が無くては、禪僧とは謂はれぬとか、禪道を修めた甲斐が無い杯とは、生物識の能く言ふことである。禪宗は平常に「生死透脱」といふことを唱へて居ることである。その臨終の事に對しては、他宗よりも特に意を留めて居ることであるけれども、これも徒らに外面にあらはれた行爲ばかりで、是非を判斷してはならぬ。禪僧は

神の力
古來「坐脱立亡」というて、安坐して眠るが如くに死んだ者、或は大樹の下に直立して、謂ゆる立往生を致した者も少なくない。

七 相摸風外

二五六
「相摸風外」といふ名で、世人に知られて居る、相州成願寺の風外慧薫和尚といふのは、曾て曾我山の巖窟に獨身生活して居られた時、文道といふ僧が、和尚の道風を慕うて来て、相見して一宿した。翌朝和尚は這の僧が食器の鉢を持參せぬを見て、鬮體に朝餉を盛つて進められる。這の僧イヤナ顔をして手に把りかねた様子を見て、汝は法の爲めに來ながら、それが嫌でドウなるかと云つて趣ひ出して仕舞はれた。小田原城主稻葉侯が和尚の名聲を聞き、使者を遣つて城中に請待したので、和尚が城内に出でゆかれると、稻葉侯は今や酒宴の最中とあつて、暫く控室に待たして置いた。和尚は乃ち「太守一國鎮。我是風外身。卒客無ニ卒主。宜假不_レ宜真」の一絶を認めて遣し、サツサと去つて、復び住菴に還らず、伊豆の山中に隠れて仕舞はれた。晩年に金

指の郷、石岡の里に草菴を結んで居られたが、一日人を雇ひ、青銅三百文を與へて、一の穴を堀らしめ、穴が堀れると、その中に飛び入り、サア吾れを埋めよと云つて、屹立つて瞑目せられたといふ。これは謂ゆる「立亡」といふもので、如何にも奇抜である。

八 快川和尚と慧春尼

甲斐の恵林寺の快川和尚が織田信長の爲めに攻められて、武田家へ義理立もあつて、山門の上に端坐して下から火を放たしめて、火定に入つたといふことは、名高い話であるが、是れもなか／＼奇抜である。しかし火定に入つた者は古から幾らもある。相州小田原最乗寺の了菴慧明和尚の妹に慧春といふ比丘尼があつた。慧春は絶世の美人であつたが、年三十を過ぎてから、兄の了菴に就て出家を乞うた。けれども了菴は、女ては出家は遂げられぬ、往々佛門を汚すやうなことがあるというて許可しなかつた。そこで慧春は爐中の焼火箸を把つて、自分の顔を十文字に烙きつけ、これ

ならば大丈夫でありませうと迫まつたので、了菴も已むを得ずして弟子とした。鎌倉の圓覺寺は當時五百人からの僧が諸方から集つて居て、その威勢なかく盛なものであつた。ところが或る時最乗寺の使僧として、慧春が赴くことになつた。圓覺寺の衆僧は、かねて慧春の機辯が頗る鋭いことを聞き及んで居るので、何んでも此度は此方から機先を制して尼僧の鼻をヒシ挫いてやらうといふ心算で、慧春が圓覺寺の石階を登つて來るを待つて、一人の僧が手づから裳をかゝげ、前の物を怒らして「吾が物三尺」と云つて、慧春の前に突立つた。スルト慧春は平氣で、同じやうに裳をかゝげ、前をサラゲ出して、「吾が物底無し」と云つて、サツサと進んで行つたので、大衆一同呆然して去つた。それから方丈に通つて住持に相見すると、侍者が大きな洗濯盥を持ち出して、それに茶を點いて、「サー御茶を」といふ。この時も慧春少しも驚かず「これは和尚常用の茶碗でありませう、イザ先づ召しあがれませう」と挨拶したので、住持も答ふことが出来なかつたといふ。是れから慧春の名聲が一層高くなつたと。傳記

に書いてあるが、果して事實とすれば、慧春は竟に一箇の蓮葉女に過ぎぬといはねばならぬ。晩年に薪を最乗寺門前の盤石の上に積み重ね、自ら火をつけて、その火焰の裡に坐禪をして、火が熾に炎え上がった時、了菴和尚が來て見て、「慧春熱いか」と尋ねたら、烈焰の中から聲を立て、「冷い熱いは、生道心の知ることでは無い」と叫んで、恬然として亡くなつたといふ。這樣な壯烈の臨終を遂げたといふことは、如何にも凡俗の耳目を動かすもので、古來非常に賞讃して止まざる所であるが、是れは熱狂的行爲であつて、中正の行爲でないから、斷じて一般の模範とすべきことでは無い。

九 某師の入定式

余は四月七日神戸三ノ宮驛に催された修養會の講演に出席したが、その時某の話に、西の宮附近の臨濟宗某老師が、過般「入定式」といふ事を行はれたといふことを聞いた。某師は疾くより納は八十歳になれば入定する。お釋迦も八十で涅槃に入られたから、納も之を真似て入定するのであるというて居られたが、本年はその八十に達

せられたから、その式が行はれたのだといふ。サテその入定式といふは、前以て入定式の日を遠近に廣告して置き、その日に至つて、深い穴を掘らしめ、衆多の僧を集め、參詣衆の前で、仰山らしい法要を行ひ、自ら大きな甕の中に入り、葬式の通りに行列をなして、その穴の中に這入て暫くすると、その穴から復び出て來つた。この時某師はウデ章魚の如くに赤くなつて甕の中から顯れたが、これは豫め侍僧に申しつけ、三升も容る酒徳利をコッソリと甕の中にシノバセテ、彼の穴の中に入つた時に銜によろしく飲んで、その酒に酔うたのでサテコソ、ウデ章魚のやうに赤くなつたのだといふ。在俗の凡夫は死といふことは非常に忌み嫌ひ、「シ」といふ音さへも口にすることを厭うて居る者が多い。それだから死んだ後までも延喜を祝つて、法名にも鶴とか龜とか、松とか椿とかいふ長壽に縁のある字を選んで用ひ、電話番号は四千、四百、四十といふ「死」と同音の數字を避けるようにして居る位に、死といふことを怖れ厭うて居るのに、豫め死後の葬式を行ふといふは、死ぬることを旅から自分の家

に歸るやうな心でなければ出來ぬことである、即ち生死一如の境界に到つて居るといへば謂へる。が、さりとて特に公衆に廣告するといふは奇を衒ふといふものである。まして穴の中まで酒徳利をシノバセテ、酒の力で穴の中から顯れ出るといふに至つては、寧ろ稽滑の沙汰と謂はねばならぬ。

一〇 蟬大夫の生葬式

曾て神戸市蟬大夫といふ義太夫語があつて、本職の義太夫はさまで上手ではなかつたけれども、一寸變つた所があつた者で、『生葬式』といふことを行つた。その様子は、多年交際せる俳優、大夫、藝妓、幫間等に廣く案内し、是等の人々は何れも立派な衣裳を着け、藝妓等はとりわけて華美を盡くして衣裳を着かざり、各手に黒塗の竹の花瓶に杜若の挿したのを持つて行列に立ち、自らは赤色の服を着けて、華美なる輦に乗つて、節あもしろき念佛につれて、市中をネリ行いて、その菩提所に到り、形如く葬式を行つた。蟬大夫は義太夫では餘り人に知られなかつたが、この生葬式の一

事で、頼に名を揚げたといふ。西の宮の某師が入定式を行つた爲めに生死を透脱したと謂はれるならば、この蟬太夫は某師に勝ること萬々である。禪は出世間の法であるといふから、奇矯飄逸を以て禪と誤るから、遂に此の如き弊害に陥る。これ皆真正の禪を知らざる似而非禪僧の罪である。

六祖大鑑慧能禪師は「内心嫌下する是れ功、外、禮を行ふ是れ徳なり」と示され、又た「心平なれば何ぞ戒を持するに勞せん、行直なれば何ぞ禪を修するを用ひん」と説かれてある。嗚呼、心行平直、實に是れ眞の禪である。徒らに奇矯飄逸の跡を追うて、邪道に陥らぬやうにせねばならぬ。偶他の話を聞いて、感ずる所があつたかて、古人と今人との間に眞偽の別あることを説いて、世人の警と致したのである。(大正七年五月八日)

第二十五 大地黄金

一 淨穢不二

清淨といふこと、汚穢といふことは、各自の心にあるので、物がらに無い。犬は人糞を以て無上の珍味として之を食ふ。同じ人間でも、印度人の如きは、牛糞を以て清淨なものとして、之を身體に塗つて喜んで居る者がある。又支那のある地方にては、牛糞を乾して、之を焼料として、物を煮炊する者がある。日本人の中でも、普通の人はい大小便を不淨な物として、非常に忌み避けて居るが、掃除をする農夫、謂ゆる「汚穢や」と稱する者は、さほど不淨とは思はず、代金を拂うて之を買ひ取つて、田畑の肥料に用ひて、米穀や野菜を作つて、それで金を儲ける。昔し唐の海東の元曉といふ僧は、諸國行脚の砌、ある荒野を通り、旅路にゆき暮れて、遂に塚場に野宿をすることなつた。夜中に目が寤めて、非常に喉が渴いて堪へられなくなつたので、闇處を手さぐりして、穴の中から水を掬ひ取つて飲んだ。ところが其味が非常に甘くあつたので、大に喜んで渴を忘れた。しかるに夜が明けてから、四邊を見まわして、夜前

水を掬うた處を視れば、豈に圖らんや、それは罽毘であつたので、大に驚き、さては夜前はこの水を飲んだのであるかと思つたれば、忽ち胸苦しくなり、腹中の物を残らず嘔き出して仕舞うとしたが、この瞬間に忽然として悟つて「心生すれば種々の法生ず、心滅すれば即ち罽毘不二なり、如來大師曰く、三界唯心と、豈に我を欺かんや」と云つて、遂に師を尋ねることを止めて、海東に歸つて佛法を弘められたといふ。

二 苦樂一枚

只清淨と汚穢とばかりではなく、高い低い、大きい小さい、苦しい楽しい等、すべて相對のことは同様である、即ち甲と乙とを並べて、甲が高い、乙が低い、甲が大きい、乙が小さいといふことが出来る。甲ばかりか、乙ばかりか、どちらか一つであつたならば、高いとも、大きいとも、低いとも、小さいともいふことはない。苦しいといひ、楽しいといふことも、矢張り同じで、苦があればこそ樂がある。その代りに樂があれば苦がある、恰ど一枚の紙に表と裏があるやうなもので、裏があるから表

がある。しかるに裏は嫌ひであるから、表ばかりを得たいと望んでも、遂に得られぬ。又茶碗の凹込で居る處と凸出で居る處がある様なもので、凹込で居る處があるから凸出で居る處がある。湯茶を入れるのは凹込で居る處であるから、凸出で居る處は無用であるといつて、凸出で居る處を取り除けるならば、入用とする凹込だ處も同時に無くなつて仕舞ふ。樂を得やうとするには、必ず苦を忍ばねばならぬ。苦をしてこそ始めて眞の樂しみは得られる。若し苦をせずして樂を得やうとしても決して得られぬ。それは丁度茶碗の凹凸と同様である。富貴は人の欲する所、貧賤は人の好まざる所である。されど富貴には富貴の苦しみあり、貧賤にも亦貧賤の樂しみはある。それ故唐朝詩人の大家たる白樂天の語に、「富貴にして苦あり、苦は心の危憂にあり。貧賤にして樂あり、樂は身の自由にあり」といふがある、又唐朝三大詩僧の一人と稱せられた禪月大師の句に、「苦中の樂々中の苦」といふがある。これ亦苦樂一枚といふことを歌うたものである。

三 雨中の紅葉

余は先年五六十人の學生と共に日光へ旅行したことがある。前日日光で中食をなし、暫く休憩、日光の諸廟を参拜した。それから霧降の瀧を見物して、旅館へ歸つた。その頃から雨が降り出して、終夜降通し、翌朝になつても休みさうもないから、止むを得ず、雨を冒して中禪寺迄往くことになつた。すると脚に豆を出来した弱虫連中は、早くも落伍者となつて旅館に留る。その他の勇者だけ草鞋に桐油紙を被て旅館を出かけた。スルト雨は益す／＼降りしきり、風さへ加はつて来たから堪まらない。路は次第に峻しくなり、脚は疲れて来る、血氣壯んな若い蓮中は、ヤンヤと騒ぎ立て進む、背後からは又後押への若連中がセキ立てる。余は苦しさに身内からは汗流れて出て、外からは風雨で濡れ、その苦しみ云ひやうなきほどであつた。しかしながら其中に風も少しく止み、雨も小降りとなり、次第に天の一方が明るくなり、山谷を閉ぢ込めたる霧も少しづつ、晴れゆくに隨ひ、今までは咫尺も辨ぜざるほどである處に、左右

に列なる千峰萬壑の紅葉は、夜來の雨に光澤を放つて顯はれ、その美麗なること綺羅錦繡の幕をかけまわしたるが如く、一同之を見て、覺えずア、何といふ麗しいことであらう。前日東照宮等諸廟の金碧燦爛たるに、少なからず美觀に驚いた、けれども彼れは人工の美術で、此れは天然の活畫であるから、眞に美を感ずる者は、實に無限の感興を生じた。そこで一同は三々五々此處彼處と思ひ／＼の處に立ち、眸を放つて遙に四方を眺めて居た。かくて又歩を進めてゆく中、藜々と百雷の一時に落ちるが如き響を聞く、これ則ち華嚴の瀧の響であるが、段々近けば水霧烟雨一面にとちこめて、瀧の姿態は少しも見えず、只音のみ聞えた。更に進んで中禪寺湖畔に至つても、湖水は霧の爲めに鎖されて、少しも水面が見えぬ。暫く湖畔の一樓に休憩して、また元來し道を下つてゆけば、烟雨殆ど晴れ、夕陽萬峰に映じて其美なること、上る時より更に麗しく、一同益々其佳景を歎じたことであつた。この時茶亭の一老婆は、余等に向つて『貴君等はこの雨を冒して御上りは、定めし一方ならぬ困難でありましたらう』

といふ。余は「實に難儀な思を致した。日光の紅葉も斯く雨に降られては、面白くない」といへば老婆は、「イヤ左様ではござりませぬ。『雨中の観楓』と申して、紅葉の美しさは雨に濡れてこそ、眞の麗さが見られます。晴天の日は固より悪くはありませぬが、動もすれば風が起り、その爲めに塵埃が紅葉にかゝつて、其美麗を減ずるものであります。今日の如き雨に濡れた紅葉の色は、この上なき美麗であります。貴君等は雨を冒し困難を凌いで上りなされたればこそ、この美麗の景色を御覽なされたこととありますから、御不足は少しも無い筈であります」というた。この時余は老婆の此一語によつて、いかにも困難を冒さなくては、世の中に眞の快樂は得られぬことを感じたことであつた。苦中の樂といふことは、觀楓の一事にても知られると思つた。

四 錢神論

然るに世人の多くは、いたづらに艱苦をせずして、安樂を得たいと思ふ。これは無理なこととて、決して望んでも得られることは無い。イヤ一時は無理なことをして金を

儲けることが出来る。けれども元來無理なることであるから、忽ちその裏に損をすることがある。はじめからの貧乏はさまで苦にならぬが、一旦金儲をしたか、或は不意に他より多くの金を得て、その後忽ち貧乏をした時は、富貴の時の快樂に相對して、一層難儀である。昔し支那の晋の代に魯褒といふ人があつて、南陽の生れてあつた。好學多聞であつたが、自ら清貧に甘んじ、他の人々が非常に鄙劣になり貪欲になつてゆくを慨いて、曾て『錢神論』といふ一篇を著して、世人を諷刺めた。その中に斯ういふ意味の言があつた。

これを失へば貧乏となり、之を得れば富貴となり、翼無くして飛び、足なくして走り、苦がりきつた顔も忽ち解け、結んで開かぬ口も直ちに發く、錢の多い者は前に居り、錢の少ない者は後に居る。(中略)位官の尊く名聲の顯れるも、皆錢の力、徳が無くても尊く、勢が無くても多くの人が集ひ來り、貴顯の金門紫闥も勝手に出入し、危いところも安くなり、死ぬるところも助かり、貴い者を賤くなし、人の生命

を殺す。

其自在の力あること神の如し、世人は錢ほど貴いものは無いと尊重して、この錢の前には頭を下げるものなき有様を叙べたものである。今や我が國も謂はゆる黄金萬能主義で、學問も錢さへあれば出来、兵役も錢さへ出せば半分免除され、人の生血を吸うて蓄財した有財餓鬼でも、錢を出せば位階爵勳を賜はるといふ。その外彼れも錢、此れも、錢さへあれば盜賊も直に捕縛して貰ひ、錢が無ければ裁判所に訴へ出ることすらならぬといふ。眞に神錢の世の中となつて居るやうに思はれるが、これで國運が益々發達してゆくであらうか。印度、支那、朝鮮等は、昔から錢を尊重することの甚しい國であつた。その爲めに今日の如き悲境に陥つたのであるが、今や我國民も既に錢神論崇拜者になつて來たのであるから、このまゝでゆくならば、彼等の覆轍を踏まねばならぬことになると思へば、實に寒心に堪へぬ。

五 黄金如糞土

昔し支那漢の代に大梁といふ處に張耳、陳餘といふ二人があつたが、二人共に金満家の入婿となつて、豊に暮して居るところから、互に胸襟を打ち明かし、遂に刎頸の交というて、死なば一緒に死なうといふ誓約を結んだ位であつた。彼等は常に、黄金は堅いといふけれども、決して堅いものではない、我等が交りの堅いのに比ぶれば、その賤しきこと糞土の如きものであると謂つて居た。しかし他日彼等は權勢を争ふやうになつては、互に消息を斷つて仕舞つたといふ。彼等の語は一時の快を取るに過ぎず、遂に支那人の地金を暴露して仕舞つた。

六 黄金の所在

しからは金錢は塵土の如く思つて、バツバと撒き散してよいかといふに、是れも大きな心得違ひである。これは重寶というて、世の中に生活するには最も大切なものである。けれども只金錢そのものを得ることばかりに心を勞して居ては、決して得られるものではない。たとひ之を得てからが、忽ち之を失ふ。英國のサレーといふ處に、一

人の紳士があつて、一年に二百磅の収入ある土地を有し、自分で耕作して居つたが、どういふ譯か、家の借財が段々増へて、返済の方がつかないのて、遂に田地の半分を賣り拂つて之を返却し、残りの田地を二十一年の期限で、或る農夫に貸した。斯くて日月を送る間に、其期限も盡きやうとする時になり、彼の農夫が紳士の家に来て、あなたはその土地を賣つては下さるまいかと云ふと、紳士は之を怪しみ、卿は吾が土地を所望せられるのかと尋ねると、如何にも左様、お差支なくば、私が買ひ請けたいものでありますと答へる。紳士は、それはおかしい話である。吾は卿に倍もある土地を持つて、借地料も拂はなかつたに、それでも負債したのである。然るにあなたは借地料を拂つて、些少の土地を耕しながら、吾が土地を買はるゝ程に利を得られたとは、實に不思議であるといへば、農夫は笑ひながら、それは只二語の差であります、卿は「爲せ」吾は「爲す」といふだけでありますといふ。紳士は其意味を解し兼ねて、それは如何なる譯であるかと問うと、農夫は、卿はイツも朝日が高くなるまで寝

床の中に眠り、或は慰に耽つて、自分の仕事をすると、他人を使つて只「爲せよ」と命られるが、我は早く起きて、他人を使ふよりか、先づ自分の事を爲るのでありますと答へたといふ。

七 富める國

ラスキンは「富とは物資ではない。富める國とは物資の多い國のことではない。富とは生命である。健全なる生命である。富める國とは健全なる生命を有する人民の多い國である」というて居るが、實にさうである。今や我が國は、歐洲戦争の結果、少しく金融がよくなつたとかで、少しく人氣が揚がつて來たのはよいが、それが只一時黄金を少しく餘計に手に入れたといふ位なことであつては、乞食が長者になつた夢をみたやうなもので、何の役にも立たぬ。富を得る根本、即ち健全なる生命が得られなくてはならぬ。健全なる生命とは何であるか、正しき信仰である。一たび正しき信仰が獲られたならば、天地無盡の寶藏を打ち開く鍵を手についたのである。この時「長

河を攪して酥酪となし、大地を變じて黄金と爲す」の自在を得る、これが人生至樂の境界である。(大正五年十一月八日)

第二十六 喫茶喫飯

一 茶禪一味

鎌倉以後の文藝は何に限らず、多少禪と關係して居らぬ者はない。文學、美術、音樂、武藝、兵法、馬術、花道、香道等、悉くその奥義を禪に取つて居るが、就中茶道は尤も密接な關係がある。イヤ全く禪道より出たものである。茶は臨濟の榮西禪師が支那から傳へて來られたといふ關係のことは且く措いて、今日茶の湯と稱するものは、室町時代に始まつて、次第に發達したものである。彼の珠光紹鷗、宗易即ち利休等は、悉く禪より茶道の奥義を悟り、そして茶の湯の儀式等も、悉く禪宗の作法を擬して造つたものである。ソコデ「茶禪一味」といふことは、古來から唱ひ來つ

て居るが、サテその實際茶道に身を委ねて居る者を見ると、多くは徒らに茶器を玩弄し、書畫を品評し、一種の儀式を覺えて、これを人に誇り示すに過ぎぬ。此の輩には世間尋常の風流の趣味さへも解する者が甚だ稀れてある。まして禪味と來ては殆ど解する者が無い。若し茶道から禪を引き抜いて仕舞へば、胡椒から辛味を去つて仕舞つたやうなもので、殆ど存在の效を認めないのである。サテこの禪味といふは、徒らに禪僧の眞似をして、頭顱を圓るめ被布を着て坐禪の眞似をしたり、あやしげなる道歌や、俳諧を作るやうなことではない。眞面目に坐禪を修めて、心底の塵念妄想を擱い去つて、清淨湛寂の境界に入つて、日用光中、喫茶喫飯の一舉一動が悉く茶道の進退に契ふやうにならねばならぬ。

二 松平不昧公

不昧公松平出羽守といへば、直に茶道の宗匠で、書畫骨董の鑑定に目が利いて居て、一代の間、華奢風流の樂を恣にした我儘大名のやうに思つて居る向が多い

が、それは甚だ誤つて居る見やうである。イヤ徳川時代に名君の稱ある上杉鷹山侯、池田新太郎少將、細川重賢侯等に比べて、少しも遜る所の無い程の名主であつたが、只だ茶道に有名であつた爲めに、その外的美感が顯れて居ない。殊に公は參禪に熱心であつた、公の茶道も文藝も、武藝も、公の治績も、公の人格も、皆な悉く參禪の結果より成つて居ることが、餘りに世間に知られて居ないのは、余が甚だ遺憾とする所であつた。然るに先年御大典の際に、藩治の功に依つて、從三位に御追陞があり、又た傳記も出來たことであるから、幾分かは世間へ知れたであらふと思ふが、余は更に余が特に感じたところを少しく世人に紹介したいと思ふ。

三 不昧公の參禪

公は徳川家康の孫、松平直政の六世宗衍の子で、實に雲州松平家第七代の國主である。寶曆元年二月十四日を以て江戸赤坂に生れ、本名は治郷、未央庵、宗納、一閑子、一々齋等の號がある。諡號は大圓庵で、不昧といふは致仕後の名である。文化十

五年四月二十四日に横臥しつゝ、

喫茶喫飯。六十八年。末後一句。有傳無傳。

の一偈を認め、溘焉として薨去せられた。その筆蹟は今なほ京都大徳寺内なる孤蓬庵に藏めてあるといふ。蓋し公は夙に江戸麻布天眞寺の大巖和尚に參じ、悻悻憤憤七年の間、朝參暮請會て怠らず、遂に大悟徹底せられたからである。公が大巖和尚に參じられたのは十九歳のときで、圓相の公案を授けられ、それから七年の久しきを経て大悟せられて、大圓庵といふ名を付けられたのである。また不昧の號は大巖和尚がつけられたのである。

公は自ら資金を抛つて大巖の編纂した『招拾録』を出版し、更に大巖の師なる月船和尚の遺著『武漢集』に自ら跋を附して刊行し、又千利休の師たる大徳寺の古溪和尚の遺著『蒲庵稿』をも出版せられた。公と同時に鎌倉の圓覺寺に誠拙和尚といふ名高い知識があつた。この誠拙和尚は、或時江戸白木屋の娘が、九死一生といふ際に、祈

禪に招かれて、米百俵と金百兩を前禮として受け取り、死にかゝつて居る娘の枕頭に坐つて、經の一つも誦まず、「御前の御蔭で、鎌倉に居る二百人餘の雲水が食べ物にありついた。その中には、一人や二人は、立派な坊主になるであらう。その功德で、御前は死んでも極樂に往ける、安心して死ね〜」と云つて歸つて仕舞つた。白木屋の主人は呆れたり、怒つたりしてみたが、娘の病氣は遂に安心の爲めに本復したといふ逸話が傳つてあるが、公はこの誠拙和尚とも互に往來して親しくあつた。誠拙和尚は公より二年後に遷化せられたが、天徳寺なる公の墓前に「彈指圓成」の四大字を書いたのは和尚である。この四字は、永嘉大師の「證道歌」の「彈指圓成八萬門、刹那滅却三祇劫」とある語から取つたので、大圓庵の號ある公の追善には最もふさはしい語である。

四 新井一掌

公の茶道は、初め三齋流の新井一掌を學び、その後諸流を研究して、遂に「諸流皆

我が流なり、別に流派あるべからず」といふ境界に至り、すべて無用の手業を省き、點茶に必要な所作を禮儀に適へ、茶の湯の本意に違はぬやうに點茶する一派を立てられた、これが即ち「不味流」である。サテこの新井一掌といふは、もと麴町の商人で、三齋流の名人であつたが、茶は末技で、禪が本體であることを悟り、夫婦別れをして、駿河の松蔭寺に赴き白隱和尚に就て參禪すること數年にして、印可を得て一掌といふ名をも貰うて江戸に歸り、後再び茶の宗匠を始めた人である。

江戸の愛宕の石段を乗馬のまゝ上り下りをして、都下の人を驚かしたといふ乗馬の名人金鱗矢島半兵衛といふ者も、公の馬術獎勵の下に出來たものである。金鱗が馬術の秘訣を捕へたのは、茶道の師たる新井一掌であつた。金鱗をして一掌に就て茶道を學ばしめられたのは公である。一日一掌の宅の附近に火事があつたので、金鱗は早速得意の馬に鞭つて飛ぶが如くに馳せつけたが、一掌の宅に火が移り、天井から黒煙が出て居る。然るに一掌は泰然自若、名残の御茶を立てるといつて、少しも騒がず「金

鱗能く來られた相客になられよ』といはれて、氣が氣でないながら、火事央の茶室に坐ると、茶手前一つも落ちなくすまし、『イザ立退かん』と釜一つ携へて出るや、茶室は焼け落ちた。この時金鱗はじめて彼の『鞍上無人、鞍下無馬』の妙旨を悟つたと、後日人々に話したといふ。

五 茶 礎

不味公は大巖、誠拙等の知識に就て參禪せられたるのみならず、その茶道の師たる新井一掌も、白隠和尚の印可を得て、斯る境界に達して居た人であつたのであるから、公の茶道は全く禪より出て居ることは明かである。公が會て村田青山といふ者に『茶礎』といふ左の一文を書いて與へられた。

茶の湯は稻葉に置ける朝露の如く、枯野に咲ける撫子花のやうになりたく候。此の味を噛みわけなば獨り數奇道を得べし。其外客の鹿相は亭主の鹿相なり、亭主の鹿相は客の鹿相と思ふべし。味ふべき事なり。客の心になつて亭主せよ、亭主の心に

なりて客いたせ、習にかゝはり、道理にからまれ、堅くるしき茶人は、田舎茶人の湯と笑ふなり。我が流儀立つべからず。諸流みな我が流にて、別に立派あるべからずと覺悟すべきなり。

これは不味流茶道の憲法とも謂ふべきものであるさうなが、一句一語の意義が皆禪から出て居る。要するに不味公の茶道は禪より出て、茶即禪、禪即茶、謂はゆる茶禪一如の茶道である。

六 不味公の寛仁

公の茶道が禪より出て、茶禪一如の境に達して居るといふても、それが只茶の湯の上にはかり現れて居ては、矢張一個の茶宗匠といふに過ぎないから、特に稱讚するに足らぬが、公は一個の茶人ではない。眞に茶と禪と一致して、一國の君主たる人格の上に溶け込んで、直接の臣下は固より領内の細民に至るまで、一視同仁を以て待た、それは公の逸事として記されてある例によつても、その一斑が知られる。

孟蘭盆の夜、月明に浮かれて松江城下の廣場で、町人共が踊りつゝ、謠ふ聲が、二の丸物見櫓に反響した。公は多くの臣下を従へて月光をめでつゝ、二本松の立つてゐる石垣の上まで來られると、盆踊の姿がありくと見える。公は興を催されて下を見卸される。踊子の中に一人の侍が、肩ぬぎ大童で、刀を一本おとし差しにして、踊り狂うてゐるのが御目にとまつた。「武士の身としてあのさまはどうしたのだ、近く召し出せ」との御言葉の下に、若侍が引き立て、來たのは、泥酔の侍、名を石倉半之丞といつて、近頃武藝の上達を誇つて、酒に耽り傍若無人の振舞多く、御手討になるのは至當と、近侍の人々片唾を吞んでながめいつてゐる。公は側近く召され、「其方は侍であるから、町人と共に盆踊をしたのではなからう、腰に一刀を帯びをるからには、定めて劍舞でもやつたのか、今後とも酒を慎み武藝を怠るな、就ては明日より側廻りとして召遣ふぞよ」との有難御言葉に、半之丞はハット平伏し、仁君の大恩に感涙咽びもあへず引下つた。この侍は、近頃江戸料理の看板をかけて客を呼んで居る居酒屋

で酒を煽つて來たのである。併し公が武備を講じ、城廓を修築し、自ら陣頭に立つて軍兵を指揮されるといふ評判が江戸に聞え、幕府の間諜として、その江戸料理の主人半助が松江に來たといふことを嗅ぎ出したのも、この侍である。今夜こそは一刀兩斷、この間諜を斬り棄んと、此の世の名残りに町人と共に盆踊をしたのである。しかるに間もなく江戸料理屋の主人半助は掻き消す如く行方知れなくなつた。翌年の參勤交代には是非とも御供をと懇望したのはこの半之丞であつた。江戸に着くと、間もなく幕府の御差紙で、不味公の御身上につき御調への廉があるといふので、家臣が呼び出されることになつた。その御使は是非とも私めに仰せつけられまするやうにと願ひ出たのも彼れてあつた。御番所に行つて見れば、上段の間に侍三人、その中の一人は確に見覺々のある江戸料理屋の主人。彼は低頭平身しつゝ、デロリと横顔を眺め、さて昂然と面を擧げ、「其方は江戸料理屋半助に相違あるまい、無實の罪を我が君様に着せ奉り、御恩賞を食らんとする曲者、生かしはあかぬ」と、言ふよりはやく、上段

の間に躍り上つて、鍛へた腕に冴えた太刀コロリと首を斬り落した。その場の早業、場内の混雑の中に手早く諸肌ぬいて切腹した。幕府では別に御咎めなく、亂心者の仕業といふことになり、公には何等の迷惑もかゝらなかつた。當時の諸大名は、出羽守は善き家來を持たれたと、羨ましがつたといふことである。

公又曾て仙臺侯の饗應を受けられた際に、料理人が粗忽より、汁碗に汁を盛り出すに出した。それが知れると、料理人は非常な落度となる。然るに公はそれを料理人の落度にしたくないと思つて、起つて廁へ入られた。その時分の作法として、貴人が廁へ入ると、その膳部を皆下げて、新らしく持つて來たものである。それが爲めに料理人の失策が分らずに済んだといふ。

公が在國中菩提所なる圓流寺へ參詣には船に乘られることになつて居た。或る時公の乗船中に、船人が過つて水竿を公の肩へ落した。その時本田權八といふ侍が、無禮者ツ、手討にする云つて、刀の柄に手を掛けた、スルト公は、竿が無禮をしたので

あるから竿を切れと仰せになつたので、權八は公の仁慈に感じて、ハツと竿を切つた。其後船人は公の畫像を懸けて日夕禮拜し、公の武運長久を禱つたといふことである。

これらの事柄は茶道の「客の心になりて亭主せよ、亭主の心になりて客いたせ」とある主客一如の心が、君心日用の間柄に現はれて居るのである。そしてこの主客一如の心といふは、即ち禪の參究より悟り得られたものである。禪も斯様に身中に溶け込んで、その一舉一動の間に自然に現れて出るやうになつて、始めて其の效果がある。偶「不昧公」の一篇を讀んで、深く感ずる所があつたので、この數節を抜き書して紹介したる次第である。(大正七年十一月八日)

第二十七 成功の秘訣

一 成功と失敗

近頃の青年は頻りに成功といふことを説いて、何卒して一日も早く成功したいと氣

をアセツテ居る。自分の希望して居ることが、その希望の通りに成し遂げられ、誰れも嬉しい心がするものであるから、成功を願ふは、敢て近頃の青年に限つたことではなく、昔からさうである。が、殊に近頃は其成功を望む心が甚しくなり、否、非常に急なつて來た。昔の人は世の中がユツクリとして居たセイか、人の心も自ら大きく、物にコセツかず、悠然として自分の職業に従事し、その成功を自然に任かした趣があつた。甚しきに至つては、學問、技藝を修むるにも、それを修めて畢竟何に用ふるかといふことさへ考へず、只その學問、その技藝が嗜きてあるから、之を修めるといふ風に勉強して居た者も、往々に見受けられた。福澤諭吉翁は十五歳の時から始めて讀書するやうになり、後に長崎に赴き、次で大阪に出て、醫師に就て蘭學を修められたが、固より醫師になる目的ではなく、又理化學者になる考へてもなく、只當時新奇なる學問で、而も非常に學ぶに困難であるといふから、之を學んでみるといふだけの考であつたといふ。即ち只學問そのものが嗜きて之を修めたといふ

ので、始めから一定の目的を立て、なかつたのである。併しその目的を一定してなかつた學問が、日本に於ける泰西文明の曙光となつて非常なる成功といはれてある。然るに近來の青年は男女を問はず、始めから成功を企て、その成功を得る方法、即ち成功に達する道筋を眞直に歩いて居る者が少ないやうである。學校に入つて規定の學科を修めて居る者も、卒業の曉には、官吏となり、技師となり、醫士となり、法官となり、商人となり、それによつて富貴を得たいといふ希望が非常に切である。その外工事に従事し、或は貿易に従事し、或は文學、美術等に身を委ねて居る者と雖も、皆その従事して居る職業に全力を注ぐことをせず、その職業より得るところの利益を捉へたいと、そればかりに心を奪はれて居るやうである。それであるから、なるべく僅少の年限に無るべく多くの學科を修めたいと思ひ、なるべく勞力を費さずして、なるべく多くの報酬を求めたいと心掛けて居る。彼等の讀む書籍が、一から十まで、速成的、輕便的に出來て居るのを見ても能く知れる。その書籍が外面ばかりを装うて、

その實粗製濫造であつて、實際に學生の學力を増すものは極めて尠ない。イヤ學生は規定の教科書を真面目に研究せずして、その講義録註解書等の極めて平易な、極めて淺薄なものを讀んで、どうかかうかして試験だけを透りぬけるだけのことを圖つて居る。甚しきに至ると、その試験さへも、真面目な答案を書かず、何とか監督者の目を偷んで、欺詐してその場を抜けやうとして居る者もある。それで受験用と稱する種々の書籍が出版せられて、それが非常な勢で賣れるといふことである。斯る心操で、斯る修業をして、出來上つた人物が、他日社會に出て仕事をする場合には、矢張不真面目な行動があらはれる。これは當然である。

彼等は原因結果の道理は能く心得て居るといふ。が、その日日の行は、原因のことは少しも問はず、只その結果のみを懸念して居る。それであるから、往々三五の十八といふ算用をしては、非常なる失敗に陥る。近頃「成金」といふ語が流行して居る。これは僅かの年月の間に巨利を得て、莫大な財産を作つたものゝ名稱である。勿論こ

の成金といふ中にも、原つて見れば種々あつて、決して一樣であるまいが、兎に角一時に非常の金錢を儲けたものは、他の多くの人々より羨まれるわけて、吾れもく々と相競うて、一攫千金、濡手て粟の攫取りといふことを心懸ける。しかし斯くして偶ま攫み取つた物は、また直に自分の手を離れて去る。これは原因結果の道理で、初めから定つて居るのであるが、凡夫はソコに心つかず、百萬圓儲つた時は、手の舞ひ足の踏むところを知らぬ喜びをなして、忽ちにして之を失へば、又七顛八倒して、遂に悶死をする。近年の中に大阪では二人も這樣は馬鹿があらはれた。イヤこれは金額が多いので、特に人の目に立ち、外のは少ないから知れぬだけのことと、日々夜々こんな馬鹿者が何程現れるか、勘定が出來ぬ位に多い。これみな成功といふものではない。甚しい失敗である。然るに世間には、その失敗の跡を見ずして、只一時に莫大の金錢を儲けたことのみを見て、吾れもく々と競うてその後を追うてゆくやうな様子が見える。誠に憐むべき次第である。

二 脚下を照顧せよ

禪宗の寺院に入れば、玄關、または僧堂等の草履、下駄を脱いで、上にあがる場處には「照顧脚下」の四大字が、奉書等の紙に書かれ、又は白字で板に刻りつけて、人の目につき易いやうに掲げてある。これは足駄草履の亂ぬやうに、上り下りする人に注意して、必ず草履や足駄を向ふむきに脱いで、キチンと揃へて置くやうにさせる爲めである。が、只その草履足駄の脱ぎやうばかりではなく、日用の一舉一動に、自己の脚下に氣をつけ、一步も苟せぬやうにせよとの注意である。何程學問が出来、辯論が達者でも、その外一切の技藝が巧みてあつても、自己の脚下が確乎として居ない者は、世の中の風の吹きやうによつて直ちに倒れる。脚下が確乎として居れば、一步を進むれば必ず一步だけ前に出る。決して後へ退かぬ。左右から揺つても動かぬ。かく一步づゝ確乎として進んでゆくならば、必ず無事に目的地點まで到着し、復た無事に歸へることも出来る。人生といふ旅行をする上に、自己の脚下を顧みて、一步づゝ

を進めてゆかなければ、何時も顛倒りだらけて、負傷の絶間は無い、イヤ負傷どころではなく、かけかへのない生命をも失ふ。十二月の今日この頃に至つて、七顛八倒して、喧嘩争論逃げ隠れ、投身縊首等の狂態悲劇を演ずるのは、一月以來の脚下を顧なかつた結果である。

今日になり菊つくらふと思ひけり

これは菊の開いたのを見て、己れも菊を作つて置けば、今頃は斯様に美しい花を見ることが出来るであらふにと、他の花を見て羨ましさの餘りに自分も菊を作つて見たいといふ感じを詠んだものである。菊の好い花を開かすには、その根分けの頃から、花が開くまで、日々の注意、手入を要すること一方ならず、一日でも手入を怠れば、それが花に影響するといふ。これは菊を造る人の説であるが、菊ばかりではなく、人間萬事みな同一の理法に支配せられてゆくものである。千里の行程も一步より始まり、その一步づゝが間斷なく、歩調を正しく進んでゆかねば、無事に目的に達せ

られぬ。然るに無間斷といふこと、歩調を正しくすることを除いて、別に秘訣があるやうに云ひふらす者があれば、成功に夢中になつて、脚下を顧みない連中は、直にその秘訣を得て成功にありつかうとする、是れが抑も七顛八倒の根本である。

三 食物と健康

健康、強壯を望む者が、色々と骨を折つて遣つて居る事に、往々甚しい間違がある。第一に食物に就ても大いに謬つて居ることがある。多く食ひさへすれば營養を増すと考へ、或は精製したる食品は必ず優等なもので、之を多く食へば必ず營養を増すと考へて、食事の贅澤を盡くして居るものがあるが、これらは丁度その反對なる結果を見る。人間の健康、強壯といふことは、食物ばかりに關係して居らぬ。又精製したる食物も多く食ふといふことばかりで、營養を増すものでない、精神の持ちやう、運動の度、衣服、住居、その外種々の關係によつて來るものである。然るに徒らに多食により、或は過度の運動によつて、健康、強壯を求むるは、甚だ愚なことである。

る。

四 労働と産額

歐洲戦争の結果、英國に於ては開戦と共に痛く陸軍も兵器の缺乏を感じたので、一方に於て徴兵制度を採用して、多數の兵士を養成し、他方に於ては多數の工場を急速に改造して、兵器彈藥を製造することに致した。それで陸軍は其數に於ても、其力に於ても獨逸に劣らぬやうになつたが、兵器彈藥の製造に就ては、職工の労働時間を延長し、男子のみならず、女子にも夜業を課し、日曜の休暇を廢止し、その外あらゆる手段を執つて、成るべく多く働かすことを圖つた爲めに、一時は非常に産額を増したが、僅かにして産出額を減じて來たので、能く吟味して見れば、職工が過度の労働の爲めに、疲勞、缺勤、死亡等の事が續々起つて、それで産額が減少したことが知れた。そこで舊の如く一週一回休業することにし、一日の労働時間を十二時間より十時間に減少し、又職工の男女、少壯の差異により、其労働時間を加減し、大體に於

て、力役に従事する男子の労働時間は、一週平均五十六時間以内とし、比較的力量を要せざる仕事は、六十時間乃至七十時間となし、女子は五十六時間乃至六十時間以内に制限したれば、その産額は却て五歩以上の増加を見るやうになつたといふことである。これに由つて観れば、過度の勞力は結局失敗を免れぬ。亦是れ我國現代の成功を急ぐ者の大に鑑識すべきところの教訓である。

五 左側の赤石

徳川時代に、江戸と京都との間を往來する老飛脚屋があつた。體力も普通、脚力も普通であるが、不思議に早く用が足りる。どうして他の者よりは二日や三日は早く往來する。近所に住む血氣な飛脚屋、之を見て忌々しがり、アノ老爺奴まさに魔法を使ひもしまいが、俺がいくら急いでも追付かぬとはどうも解らぬ。ヒョツとしたら、何か秘傳でもあるか知らんと、一日老爺を訪ねて、其秘訣の傳授を請うた。老爺はニツコリと笑ひながら、「イヤ別に秘傳や秘法などある譯はない。唯永年の往來てよ

く慣れて居るまでのことだ」と取合つて呉れぬ。若者は再三懇願するので、老爺も其熱誠に動され、「それでは話さう。但し秘傳といふ程のものではない。江戸から京都迄行く道の左側に赤い石がある筈だ、よく氣をつけて見落さぬやうになされ、その石が見附かりさへすれば、今迄よりはキツト早くなる。これだけの事だ」と教へた。若者は非常に喜んだ、江戸を發足する時から左側に氣を付けて、例の赤石を見落すまいと力めた。静岡までになかつた。名古屋までにはと思つて行つたが、矢張り無かつた。とうとう京都に着いたが、竟に無かつた。そこで若者、來る時に見落したのかも知れぬ、今度こそはと、歸りにも側目も觸らず右側に氣を付けた。江戸へ歸り着いた、矢張り見當らなかつた。若者は心中大いに不平で、狸老爺奴、俺を騙したに相違ないと、草鞋ばきの儘、老爺の家へ嗚鳴り込んだ。老爺は少しも驚かず、マア〜と押鎮めて、「赤い石は無かつたかも知れんが、いつもと比べては二日や三日は早かつたらうと思ふが、ドウダネ」といふ。若者は慌て込んで居た爲め、日の勘定などは忘れて居た。

老爺の言葉に氣が付いて、指を折つて見ると、成程二日程早かつた、老爺は一段顔を和らげて「それでお前さんの望は叶つた譯だ、望さへ叶へば、赤石は無くとも負けて置いておくれ、實は赤石があるといつたのは眞つ赤の嘘サ。若い人達は無闇に先足掻ばかりして、足許に氣を附けぬから、氣を急ぐ割に足が進まぬ。赤石でも見付けやうとすると、否應なしに脚下に氣を付ける、そこで自然に龜相なしに早く歩ける。かう思つた爲めに有りもしないものを有るやうに謂つた譯、秘傳といふのは此外には無い、これから先も此の心掛を專一になされ」と説き聞かした。若者も今更ながら嗷鳴り散したことの面目なく、且つは善いこと聞いた有難さに、慇懃に禮を述べて立ち去つたといふ。

六 急がず休まず

余が郷里なる出雲の廣瀬に、四十年前以前に太平といふ江戸生れの飛脚が居た。これは五尺そくくの小男であつた。廣瀬から京都まで七十里、而もその三十里は、非常

な險坂峻路の處を、四日又は五日で往復して、一藩の用事を辨じたものであるが、余が父が渠に向つて長途を早く往復することの秘訣を尋ねた時、渠は、別に秘傳はありませぬ、が、但だ急かず、休まず、家を出た時から、家に歸るまで同じ足並で歩くことが肝要であります。素人は初めは元氣にまかせて急ぐ、急ぐから疲れて休む、休むから遅れる。ツマリ歩調が揃はぬと、途中で休むので手間取ることになります。私はそれを致しませぬ。それで他の人よりも早く往復が出来ますと答へたといふ。この太平の言は簡單であるが、彼の老飛脚と同一の理を談つて居る。事は無智の老夫が飛脚の秘訣を傳へたものに過ぎないが、彼等が多年の經驗から自然に會釋した言として、人事の多くに向つて、尊い教訓を垂れて居る。遠大な志望、高尚な事業を成就しやうとならば、先以て日常普通の事に眞摯着實であらねばならぬ。「大功は細瑾を顧みず」といふは、英雄豪傑が自ら快とする傲語であつて、君子聖賢を學ぶ者の取るべきことではない。天上の月を貪り見て、手中の珠を失ふこと勿れ。(大正六年十二月八日)

禪の力
第廿八 長壽の秘訣

二九八

一 命は物種

世の中に何が大切といつても、命より大切なものはない、金銀財寶は大切な重寶には相違ひない。家屋敷も大事である。衣服道具も必要である。學問智識も、名譽位階も、悉く入用である。けれども其大切であり必要であるといふは、その身體を保つてゆく上にこそあれ、即ち命あつてのこととて、若し命が無ければ、何程金銀財寶があつても、何程結構な家屋敷、衣類道具があつても、之を用ふることは出来ぬ。世の中の面白いといふも、憂いつらいといふも、嬉しいといふも、悲しいといふも、みな悉くこの身體があつてのことである。それであるから、昔しから今日まで幾千萬億の人間が生れたか知らぬが、恐くは一人として命の不用だといふ者は無い。たまく命を二束三文に打ち捨てる者が無いではないけれども、それは種々な事情よりして已むを得ず觀念してのこととて、最初から不用と思つて打ち捨てるのではない。世間の一

切の事は、すべて此の人間が命を保つてゆく上に現はれて居るのであれば、人間の最も大切に研究すべきは、この長生の法である。

二 不老不死

昔し支那の秦の始皇といふ天子は、當時の諸侯たる、齊、楚、燕、韓、趙、魏の六國を征服して、自ら天子の位に即き、夷から攻めて來ぬやうにと、萬里の長城といふ、非常に長い石屏を造り、夷の攻め來るのを防ぎ、千萬年の後までも相續してゆきたいと思ひ、自分の身も何時までも死なぬやうにしたいとの望みから、仙術に由て長生致さうといふ考で、徐福といふ仙術修行者に相談をすると、徐福がいふには、東海の邊に仙人が居る蓬萊、方丈、瀛洲といふ島がありまして、其處には不老不死の神薬があります。それを服みさへすれば、千萬年の長壽を保つことが出来るといふことてあります。しかしその仙人等は童男童女を好んで居りますので、それを澤山に遣れば、彼の薬を貰ふことが出来るといふ。そこで始皇は五百人の童男童女と、澤山な

黄金白銀とを與へ、大きな船に積み載せて、徐福に仙人の島に到つて不老不死の神薬を取つて來いと命じた。徐福は畏つて、彼の船に乗つて出發したのであるが、それきりどうなつたか消息は無かつた。もとよりソナ島もなければ、ソナ薬があるべき道理が無いから、徐福が取つて歸らうやうも無い。しかし是れは始皇ばかりでは無い、支那の漢時代から更に仙術といふものが盛に行はれ、歴代の天子を始め、多くの人が之を信じたことであるが、不老不死といふやうな事が實際にあるものでない。これは人間が永久に長生したいと希望があるから、それにツケ込んで、狡猾な奴等が、旨い利欲を得たいといふ考へから、つくり出した虚誕に過ぎないのである。

三 仙人の長生法

尤も仙術の中にも種々の養生法が説いてあつて、實際効のあることもあるが、如何なる靈妙な法にせよ、人間が永久に死なぬ、すなはち此の身體が永久に亡くならぬといふことは斷じてあらぬことである。只普通の人に比較して、無病で長生をしようと

いふだけのことである。彼の仙人の如く、世俗紅塵のウルサイ土地を離れ、青山緑水の間に入り、酒肉の飲食をさけ、霞を吸ひ雲を踏んで居るといふことは、たしかに長生の効があるに相違ない。しかし多數の中に一人や二人は、こんな風な人も珍しくてよいけれども、世間多數の人が皆仙人的長生をしては、世の中は干物同様になつて仕舞ふ。仙人とは、山の人といふことで、世間人間の群を離れ、深山幽谷の中に入り、猿や鹿の如く、孤獨生活をする者で、つまり人間でありながら野獸の生計をするのであるから、元來人間の爲すべきことではない。たとひ百歳、二百歳の長生をしてからが、人間の爲ることをせず、只猿や鹿が長生をしたと同じであるから、人間としては何の効も無いことである。要するに仙人的長生は人間には不必要である。

四 壽命は天命ばかりでない

しからば人間は如何にして長生を成し遂げらるかといふと、矢張人間の身體を大切に取扱ふことによつて成し得らる、「死生命なり、當貴天に在り」と、儒教でいうて

居るが、是れも解釋、説明の附けやうで、種々に云へるであらうが、人間の壽命、貧富、苦樂等、一切萬事、皆天命である、天命によつてチャンと定まつて居るものとすれば、世の中は誠に面白くないものである。骨を折つても財産を造ることも出来ず、學問しても智識が開けず、工夫をしても發明が出来ぬことになる。ところが實際世の中はソナ化石のやうなものではない。佛教では「有爲轉變は世の習」といつて、今日と言へば、世の中は活動するものといふ。すなはち貧乏人も精を出して稼げば、稼ぐに追いつく貧乏なしで、次第に富裕になり、愚鈍な者でも、熱心に勉強すれば、遂に學術に達して博士學士にもなる。之れに反して怠けて居れば、天才も馬鹿となり、遊んで浪費して生計せば、富豪も乞食になる。さすれば人間の壽命も多少は先天的に原因して居ても、その上は自分の身體の取扱ひ方によつて、短命で終るものもあれば長壽を保つものもある、ソコで只天命であるとか、前世の約束であるとかいつて、やりつばなしに身體を取扱ふのは愚といはなければならぬ。

五 身體の取扱方

身體を取扱ふといふは、器物などを取扱ふとは違ふ。器物は用ひずに、ソツト藏めて置けば、損せず居るが、人間の身體は活物であるから、器物の如くソツト仕舞つて置くわけにはゆかぬ。日々夜々使はねばならぬ。使ふには、衣、食、住の三つが調はねばならず、仙人生活は別として、住居、衣服、食物の三つが、その身體に適して居ることが第一條件である。しかるに世人多くは、衛生は只食物ばかりを注意すればよいと思ひ、衣服や、住宅も、世間の前を飾ることに氣をつけて、實際に衛生の上には如何であるかといふとを考へぬ。甚しきは食物も、旨い物を心の儘に食ひさへすれば、それでよいと思つて居る者がある、これは大なる間違である。衣服と住居とは寒暑を防ぎ、眠食に便なるを程度とし、食物は滋養と消化とが肝要である。しかし衣食住に次いで肝要なのは運動である。運動のことは、近來世間の人が頗る注意するやうになつたから、別にいふこともない。

六房事

最も慎むべきは房事である。近年花柳病と稱する病氣が盛に蔓延して、青年の體格が弱くなつたといふ。この病氣は禽獸界に發生せず、原始時代には無かつたのが文明になるに随つて發生したものである。それて之を文明病とも稱するといふことである。昔しから過淫の者は短命であるといふことは聞いて居るが、近日某誌に下の記事があつた。米國のシャノン博士はシカゴ市に講演し、過淫の害を詳細に説いたところが、講演後一人の男が博士に面會して、「ア、貴君の話を三年前に聞くことが出来たなら、私は貴君に百萬圓を進呈したのであらう」と云つた。博士は不思議に思ひ。それは何故かと尋ねると、彼の男の言ふには、「私は三年前に天にも地にも代へ難い最愛の妻を失つて、今猶ほ快々として一日も楽しい日を送ることが出来ない。その前年に愛妻が段々虚弱になるので、出入の醫師に診察させると、これは別に痼疾があるてはないが、轉地療養をせぬと、一年は迎も持てぬといふから、早速轉地することにし

て、歐羅巴の名所を漫遊して、一年たつて返ると、愛妻は直ぐ彼の世の人となつてしまつたが、今貴君の講演を聞いて、始めて其醫者の話の意味がわかつた。愛妻は單獨で轉地させねばならなかつたのであつた。私が何處までも一所に付いて居ては、何にもならないのであつたことを漸く今日悟つた。今の醫者達はつまりらぬ所で遠慮して、は徹底せぬことを遠廻しに言ふから、私は遂に身にも家にも代へ難い愛妻を失ふことになつた」と、男泣に泣いたといふことである。これは世間に能くあることであるけれども、一向に氣がつかずに居る者が多い。衣食住、運動、その外のこと程よく調うて居ても、この一事を慎まなければ、セッセと貯金をする積で、底の無い瘡の中に金貨銀貨を入れるやうなもので、何時までも貯蓄は出来ぬと同じやうに何にもならぬことになる。

七身心の關

しからば衣食住と運動、並に房事等が程よく行はれてゆきさへすれば、それで長生

が出来るといふに、さうでは無い。以上は肉體上のことである。人間は下等動物と違つて、高尚なる精神がある。即ち身と心とがあるから、只肉體だけの調和がよくても、精神の健全、調和を得なくては、長生することは出来ぬ。身と心とは、一箇の物體の裡と表とのやふなもので、裡面から視て心といひ、表面より視て身といふ位なものである。イヤ人間は心の方が主となり、身の方が賓となる。それ故に古人は養生の點に於て特に治心を重んじて居て、心さへ程よく治まつて居るならば、身の方は別に注意をするの必要は無いとキメて居たらしい。けれども身心相關の理に反して居ることであるから、強ちさうはゆかぬ。

八 道德と衛生

孔子は七十年以上に達しられたが、顔回は三十にならぬに早死をし、冉伯牛は癩病で死んだ。陸象山は五十三、王陽明は五十七で死んだ。中江藤樹は四十一で死んだ。彼等は精神修養は充分に出来て居たであらうけれども、全く肉體上の病氣を壓すること

とは出来ぬ。藤樹も陸象山も肺結核病に罹つたらしい。王陽明は蠻地の毒霧瘴烟の爲めに身體を損じたらしいといふことである。しかし概して云へば學者、宗教家といふやうな浮世の名利權勢を求むるに汲々とせずして、精神を非理の事に勞せぬ者は、どうしても長生をして居る。只道德さへ堅固であれば、肉體はどのやうにしてもよいと思ひ、道德家必ず長生をするものと思つてはならぬ。が、精神修養を主として道德を守り、且つ肉體上の衛生に注意すれば必ず長生をする。貝原益軒は衛生と道德とを調和して實行した人である。その結果として幼少の時には身體が虚弱であつたのが、八十歳の長壽を保つて、而も多くの著述をなして居る。しかし是れは肉體を程よく保つたといふに過ぎずして、未だ永久の長生を得たとはいはれぬ。

九 宗教的生活

人間の生活は、その種類は極めて多いことであるが、ザット四種に分けることが出来る。即ち第一は動物的生活、第二は法律的生活、第三は道德的生活、第四は宗教的

生活である。第一は、自分一己丈旨い物を飲み食ひし、思ふまゝに性慾を恣にするこ
とが出来れば、ドンナ悪いことでも敢て之を爲し、その爲めにドンナ刑罰に處せられて
も、耻しいとも何とも思はぬ。自分の慾望を達する爲めには、父母妻子を打ち殺して
も、何とも思はぬといふ人間がある。これは人間の形であつても、その心もその行も
虎狼に同じであるから、人にして人に非ず、野獸である、これを動物的生活といふ。
第二は、法律の畏るべきことは能く心得て居るが、その法律に觸れさへしなければ、
どれほど徳義に背かうが、人情に背かうが、少しも頓着せずして己れの利慾を逞す
る、これが法律的生活である。これは動物的生活の者よりは、稍勝れて居るけれど
も、只法律といふ制裁があるから、それで獸慾を抑へて居るだけで、若し法律が無け
れば、直ちに獸慾を逞うしやうといふ念が絶えぬ。それ故常に安心といふことはな
く、眞の喜悅といふものは無い。第三に、法律は無くとも、常に道徳を守り、一言一
行、倫理に違はぬやうにして居る。かやうな人には法律の制裁は無用である。それ故

世間では之を賢人、君子と名づける、しかし倫理といふものは、人間の守るべき義務
として行ふものである。義務の行爲は、自分の心でツトメとするのであつて、自分は
嬉しくてたまらぬ、楽しくてたまらぬといふ心ではない。例へば養父養母に孝行し、
或は養子養女を愛育するやうなもので、何といつてもツトメとしての行爲になる。そ
れであるから天真自然の慈愛が起りかねる。若し第四の宗教的生活は、眞實の子が眞
實の父母に孝行し、眞實の親が眞實の子を慈愛するやうなもので、最早義務だ、道徳
だといふ感念もなく、只何がなしに父母を愛し、子女を愛する、否自分といふものを
忘れて、之を慈愛するのが何よりも楽しく、何よりも嬉しく、何よりも有難いといふ
感念で、父母に事へ、子女を育てるやうなものである。勿論此處に至れば、法律も倫理
も必要無く、自然に行はれて行く。ツマリ倫理は義務的行爲、宗教は感謝的行爲であ
る。嬉しく楽しく、有難くてたまらぬといふ感念が全身に充ちわたつてあれば、その
肉體の健康なることはいふまでもないから、自然に長生する。それであるから古來聖

人、高僧には長命せられた方が多い。往々種々の事情の爲めに短命にして終れても、その人達は已に壽命の長短は固より、生死といふことも離れて居られるから、常人自身には、その短命を何とも思はぬのみならず、肉體は死んでも、その精神は不朽に傳はつて、生きて活動して、幾千年も世間を利益して居る。ツマリ精神上に大安心、大安樂を得て居るならば、何時何處で、如何なる事變に出遇うても、誠に愉快である、この宗教的生活を得ることが、即ち眞の無窮の長壽である。

十 無窮の長壽

越後の良寛和尚に、或る人が長生の法を問うた。スルト和尚は、御前は何年まで生きたいと思ふかといふ。八十までは生きたくうございます。八十でよいか。そんなら八十にはキツト死ぬから、八十一までは生られぬが、それでよいかと尋ねる。ソんならば九十迄。九十になればキツト死ぬが、九十でよいか。ソんならば百まで。百でよいか。ソんならば二百まで。二百でよいか。ソんならば三百までと。段々増して際限が無い。ソ

コデ良寛和尚、それではイッソ永久に死なぬ法に致したがよいではないかと言はれる。彼の人、どうぞその永久に死なぬ法を授けてくださいといふ。それならば百ぢや二百ぢやといふ少數を捨て、佛の無量壽を受け取つたがよいと云はれ。茲に始めて佛心を悟り、眞に長生法を得たといふことである。近來歐洲戦争の結果、世界各国の人心は殆ど顛倒し、歐洲諸國の人々は固より、我國の人々まで、道德、法律を蹂躪して、野獸的に逆轉しかけて居る、その煩悶、苦惱の状は實に見るに忍びぬ。斯くては文明の効は無きことになるから、今に於て大覺醒をして貰ひたいので、新年早々芽出度の長壽法の話をした次第である。(大正八年一月八日)

第廿九 富 貴 樂

一 何物か是れ富貴

富貴は人の欲する所、孔子聖人さへも、富貴は嫌ひては無いと言はれた。しかし又

『死生命あり、富貴天に在り』と、壽命も天命によつて定まり、富貴、貧乏も天命によつて分かれるものであるから、人間の思ふまゝにはゆかぬ。若し人間の力で求め得られるならば、他の門番でも、夜廻りでも、どんな賤しい職業をつとめても、之を勤めて、富貴の身になりたいと思ふ。しかし是れは偏に天命によつて定まつて居るものであるから、自分は徒らに苦辛して之を得やうとは致さぬ。尤も不義不道の事をすれば、或は富貴を得られることもあらうが、不義の富貴は、浮べる雲の如くであるから、左様な富貴を求めやうとは致さぬといふのが、孔子の見解である。人間の死生、貧富が天命によつて定まるといふことは、一種の學説であるだらうから、これは別として今は論ぜぬが、富、貴、樂の三つは、古今東西を論ぜず、齊しく人間の欲望して止まざる所のものである。否、人間の多數は此欲望を遂げたい爲めに、一生區々として苦心勞力して居るのであるから、實は人生に於ける唯一大問題である。

孔子孟子の學は、仁義忠孝を先きとなし、老子莊子等の學は、虛無恬澹を第一とな

し、佛敎は固より清淨無我を以て、其根本と立て、あるから、日本では昔から餘りに此の欲望を奨勵しなかつた。殊に武士道精神を鼓吹する爲めに、この欲望を壓抑して、只管清廉潔白の氣風を養つたものだから、往々極端に頑固なる潔癖の人物も輩出した位であつたが、何分人類一般の欲望であるから、多數は矢張この追求に身心を勞して居たのである。トコロへ西洋の文明が輸入せられてから、功利主義、實利主義とかいふことが行はれ、又一方では利己主義とか、自由主義とかいふことも唱へられて、從來國民精神の根柢となつて居た、儒道二敎、佛敎の説は、悉く陳腐迂遠にして、取るに足らぬと、一概に排斥して、之れに代ゆるに、從來抑へつけてあつた富貴の欲望を挑發助長することになつたから堪まらない。人々只一己の富を得ること、只一己の名を揚げることをのみを圖つて、その結果が、社會國家に如何に影響しやうと、そんなことは少しも顧みない。殖産、工業、貿易、商賣みな此の精神で遣つてゆくのであるから、遂に國家の富強といふことにならず。否、今日では五十年前に比ぶれば、

國家文明の發達や、近來歐洲戰爭の結果により、多少の富を得ては居るが、是れが悉くその道を以て得たものと思はれぬ。一は時勢の變遷によつて、偶然に得たものも少くない、之を程よく用ゐないといふと、却て意外の禍を蒙ることになるも知れぬ。兎に角今日までの處國民一般に只富といふものを攫みさへすればよいといふ慾念に於かれて、日夜狂奔して居るのである。

二 眞の富は無し

かゝる狂熱に冒されて居る人に對しては、正中の説を聞かせるよりは、寧ろ反對の説を聞かせるがよい。左方に偏して居る物を中正にするには、右方に傾けるのがよい、一方に熱して居る者には、頭から冷水をブツかるに限る。近來殊に『成金』といふ一類の輩が出来て、世間に横行して我儘勝手を振舞うて、自ら大に誇つて居るが、その國家人民の氣風を腐敗墮落せしむることは申すまでもなく、當人自身又は當人の家族、親戚、並に其手下に居る者が、果して満足して居るであらうか。若し満足して居

ないとすると、その數千百萬の財産は果して何の用に立つか。全體「富」といふことは「貧」といふことに對する名目であつて、富といふ一個の物があるのではない。千圓の財産ある者より、一萬圓の財産ある者を見れば、一萬圓の者は富者である、けれども二萬圓の者に對すれば、一萬圓の者は貧者といはなければならぬ、二萬圓の者が更に五萬圓に對すれば、一萬圓の者と同等となる。たとひ百千萬億の富も、只これ彼れと此れと比較して、貧富の差別あるだけのこととて、これぞ眞の富といふべきものは無い、否富の全く無いのではないが、一時の假りの相場である。その假りの相場を足場として身を立て居るものは、他の財産の多少に對して心を動し、自ら満足する所がないから、飽くことを知らず、如何なる不正の手段をもつても、有るが上に富を重ねやうとする。大阪に於て先きに百萬圓も市公會堂の費用に寄附して、義侠の名を揚げた間もなく、些少の損失から自殺した相場師があり、近頃又綿絲で百萬以上の巨利を獲た商人が、商品暴落の爲めに自殺したといふ。百萬圓の富は、常人の得らるゝ所て

はない。しかし常人自ら富といふことを知らず、又之を獲るに道によらず、自ら之を守るの法を知らず、それで莫大の富を擁へて、餓死同様の悲惨に終つたのである。彼等は徒らに相對の富を逐うて絶對の富を知らぬ。絶對の富とは、足るを知ることである。

三 知足是至富

「足るを知るは是れ至富なり」満足といふことを知らぬ者は、百萬億の長者になつても、菰を着て居る乞食よりも貧乏で、謂ゆる有財餓鬼といふ者である。眞に足ることを知つて居る者は、即ち無上の富を得た者である。西人も「足ることを知るは天分の富なり」とか、又「満足は無盡藏の財なり」というて居る。

越後出雲崎の良寛和尚は、繼母の實子に家督を繼がせやうと、出家遁世し草菴を結んで自ら五合菴と號して此に居り、日々市中に托鉢して、米五合を得れば歸つて、菴中に坐禪をして居られた。或る人が之を慰めれば「住みなれて、こゝも廬山の夜の

雨」の一句を詠んで送られた。和尚は詩、歌、書共に秀いて居られてあつた。藩主が其名聲を聞いて、和尚を請待しやうと、先づ人を遣つて菴の内外を掃除させられた。ところが良寛和尚托鉢から歸つて来て、之を見て、あつたら草を刈り取つて蟲の音を聞くことが出来なくなつたと嘆じ「焚くほどは、風がもてくる落葉かな」の一句を獻じて、その招聘を辭せられたといふ。嗚呼、何といふ高潔瀟洒な境界であらう。

江州の或る處に非人ばかり住む一の村邑があつた。非人は非人相當に其村中にさゝやかな橋をかけたが、其渡初といふので、非人頭と覺しき者圓座を作つて其處に坐つて居ると、村の者どもが渡初の祝儀というて、色々の物を持つて来る。其中に一人瘦せ衰へた、色の黒い男が、茄子三つを持つて来て、恭しく頭の前に捧げた。頭は一目見て「貴様は此間から病氣で寝て居たといふてはないか、それに此の茄子はどうして手に入れた」と問うた。「へエ永の患で稼ぎもならぬ折柄、今日は橋の渡初で、何か祝儀を持つて出よと、小頭から申渡されましたので、昨夜他處の畠へ往つて之を盗ん

で参りましたやうなわけで……」頭は忽ち氣色を損じ、容を正して嚴に言つた「元來乞食するのは盗みをすまじき爲めじや。盗みするほどなら乞食はせぬ。貴様は此村の住ひなるまじき者ぢや」と、更に小頭を顧みて、此の者病氣全快を待つて、早々村を放逐せよと嚴命した。乞食は怠惰者のすること、決して稱むべきではないけれども、自ら足ることを知つて、敢て他人を害せぬ。現代不義にして富豪となつて居る者は、此の乞食に對して慚死すべきである。

四 無求是至貴

『求むること無きは是れ至貴なり』尊貴も人の願ふ處、併し尊貴も種々あつて、道德、智識、藝術の爲めに人より尊敬せらるゝのと、父祖の勳功によつて爵祿、位階等によつて、他より尊敬せられる事もある。前のは天爵で、後のは人爵である。天爵のある者は第一の尊貴であるが、人爵の者は必ずしも尊貴ではない。現代貴顯紳士と稱せられる者の中には、いかゞはしい者が多い。今成の華族の中には、自分が不義の富

を得た、その中から三分か五分の献納金を出して位階勳爵等を貰つた者がある。先年政府が財政困難の爲めに、海防費五千圓以上を献納した者には従五位を與へるといふことで、従來高利貸や、不義の働をして富を得た者の中に、競うて献金して従五位に列せられた者もある。斯様な者は醜婦が白粉や紅をつけ、美衣を着けて、人に誇るやうなもので、本人は得意であらうが、識者はその不調和を認めて居るから、決して稱讚することは致さぬ。彼等は實に孔雀の真似をする鴉と同様で、一見してその醜陋なる態度が顯はれて居る。

俳人一茶は稍奇矯の嫌はあるけれども、その獨立自尊の氣象に至つては、古今比倫罕なるものである。曾て加賀侯が柏原に一泊の折柄、一茶の名を聞き、召し出して逢うて見やうと、侍臣を以て召出されたが、その召に應じなかつた。そこで侍臣、金梨地の高薪酬の箱に入れた書畫帖に書を索めた。一茶は此美帖を汚すに堪へられぬと云つて、辭いうたが、許されなかつたので、一茶は缺けた硯の塵を拂ひ、唾液を以て

墨を磨り流し「子供等がの、様といふ梅の花」と書いたので、侍臣は餘りに無禮であるといへば、一茶は、私はこれで御免を蒙る。若し不可とあらば、引き破られてもよいと、スマしていふので、已むを得ず返つて献上すると、加賀侯は却つて満足に思はれ。金子十兩を興へられたが、一茶は戸を閉ぢて之を受けず、強ていへば、此屋敷の地代として三分丈を申受けませうと、餘は悉く返した。後、侯が國許より紫檀の硯箱に良硯を添へて贈られたれば、人々珍しい品だというて、見に来る者が多く、道具屋某殊に涎を垂して居た。一茶、これが欲しいなら、持つて往けと云ふ。或る人、何故に珍品を秘藏して置かぬと問へば、見に来る人が多くて、煩いからと云つて、遣つて仕舞つた。某は之を江戸に持つて出て、數百兩に賣つたといふ。一茶此の時の吟は、彼の『何のその百萬石も笹の露』の一句であつたといふ。僅十七字で、百萬石の加賀侯をして、顔色なからしめたものは、天爵の人物に優れる證據である。即ち求むること無き心は、何人に對しても耻る所が無いから、眞に大尊貴である。現代の學

士、政客は、成金の富豪、今成の華族の前に拜伏して追従だら／＼である、一茶の傲骨を有する者果して幾人かある。

五 安心是至樂

「安心は是れ至樂なり」富貴は人の欲する所なり。家に巨萬の富を擁し、位、人臣の極を盡くしても、自らその心の中に安んずる所が無くては、その富も、その位も、却て重荷となつて、自心を苦しめる物となる。かうなつては富も位も、其名だけあつて、其實は全く異なる。これは畢竟樂しみを物に求めて、即ち富と位によつて樂しみを得やうとするからのことであるけれども、富も位も其物だけでは樂しいものではない。第一に心が安樂であつてこそ、富も位もその効がある。例へば美酒佳肴は、人の欲する所であるが、若し心に愁ひ悲むことあるか、或は胃腸等の病氣で發熱して居るといふやうな時には、山海の珍味、絶品の美酒でも、之を口にする心になれぬ。否之を見ることが好まぬ。之に反して胃腸健全で、自心安穩の時は、香々に茶漬でも、非

常に甘味を覺ゆるものである。それ故に徒に富貴を得んと苦辛するよりも、先づ第一にその富貴を享くる心を安樂にすることが肝要である。如何なる快樂も心安からされば苦しみとなる、安心は是れ至樂である。而して安心は宗教によつて得らるゝ。現代の人は、宗教を信せず、安心を求めず、徒らに物質の快樂を逐ふ、是れ顛倒の甚しきものである。現代は富、貴、樂の三を得んとして、日夜狂奔して居る者が甚だ多い、實に熱狂して居る者が多い。斯る時には冷水を頭上よりブツカけるの効をあらはすには、消極的なれども、斯様な偉人の行跡を讀んで自ら省察するが最もよい。

(大正七年十一月八日)

第卅 禪の實修法

一 禪は實修の法門

近來諸方に於て禪學といふことが盛に流行して、處々に禪學會、參禪會、禪道會、正傳會、不識會等の名稱によつて、在家僧侶達が集つて坐禪のことを研究するに

至つたのは、斯道の爲めに賀すべきことである。これは世人が餘りに物質的の慾望を充たすことに汲々として、却つて煩悶、懊惱するやうになつたので、その反動から起つたものであらふ。凡そ物は窮すれば變じ、變ずれば通ずるの理で、餘り物質の一方に傾き過ぎ、その極度まで行きつまつた結果、又精神の方に向つて進まうといふやうになつたのであらふから、自然の傾向といふべきである。然るに是等の會に於て行つて居る所を見れば、少しく方法を誤つて居るやうに思はれる。

大體禪といふものは、古より『參ずべくして、講すべきものには無い』としてある。それで古來坐禪専門の道場では、講釋といふことをせずして、初めから道場に入つて、一生懸命に坐禪をすることになつて居た。勿論その師匠即ち師家と稱する人が、坐禪に於て注意を與へたり、公案を授けて工夫をさせたり、或は策勵をしたり、古則の提唱といふことを致して、參禪者を指導することはあつたけれども、禪の説明をするといふことは致さなかつたものである。然るに近來の禪學會等に於ては、只管

禪の講釋を専らとして居て、間には公案の工夫に力を入れて居るものがあつても、實際に眞面目な坐禪を行つて居る者が甚だ少くないやうに見える。これは現今の人は、學問的の智識が發達して居て、何事も委しくその説明を聞き、自分に於て理解せねば承知が出来ぬといふやうになつて居るから、自然にさういふ風になるのであらうけれども、かくては禪の本質に反して居るから、たとひ多少の勞力を費して行つても、純粹なる行り方でないから、眞正なる禪の効果を收めることは出来ぬ。余等も近く十年來諸方の禪學會の請に應じて出席することであるが、その多くは矢張禪の説明、禪書の提唱等のみであつて、眞に坐禪を實行して居る者は極めて少くない、間には接心會とか稱して、一週間若くは五日、三日と日を限つて晝夜坐禪を行ふ處もあるけれども、これは只公案の工夫であつて、一週間に公案を幾つ解して、師家の許を得たとか、その接心會に幾人の見性をしたとか、幾人の悟道者が出たといつて、それを名譽のやうに思つて、自他に誇つて居るやうであるが、これ亦眞正の禪道を行ふとは謂はれぬ。そ

れて余は二三年以來、諸方の講習會等に於ても、一通禪の説明をして、そして坐禪の仕方を説き、會員に坐禪を實修するやうに勸めて居る次第である。

二 禪の變遷

一口に禪というても、その内容は時代と土地によつて異なつて居る。禪は印度に起つたものであるが、釋尊出世以前から疾くに行はれて居たものである。それが釋尊によつて大に改革せられ、それから支那に傳はり、又達磨か支那に來られてから、自然に坐禪専門の宗派が出来るやうになり、遂に世人が達磨宗と稱するやうになつたのである。その達磨宗も次第に發達し、達磨から六代目の祖師なる大鑑慧能といふ人に至つて益々隆盛となり、それから遂に五家七宗といふ分派を生ずるやうになつて、それが日本に傳つてから、今日まで殆ど七百年を経て居る。この間に幾多の變化を受けて居るのも當然であるが、その變化する間には種々の弊風も生じて居る。けれども禪の本領といふものは決して相違しては居らぬから、余は其の弊風を追はず、なるべく正

しい方に進めてゆきたいと思つて居る。トコロデその正しい方は平易簡單で、一見した所では、何等の奇特が無いから、通常の人から面白く思はれない。けれども効果は却て其平易簡單な方にある。例へば漢字を書くに、楷書、行書、草書、隸書、篆書等の別がある。トコロデ隸書、篆書、草書等は見たところは誠に雅致があつて面白い、けれども、特種の場合の外は容易に用ひられず、又之を習ふにしても非常な勞力を要する。行書や楷書は正確にして真面目であるから、特に奇妙な雅致は見えぬけれども、書くに間違は無くして、最も實用に適して居る。加之楷書や行書を習うた上で書くのでなければ、その隸書、篆書、草書といふものが本統の文字にならず、他人にも讀め兼ねるやうなものより書かれるものでない。それであるから漢字を習ふには、是非とも最初に楷書を習ひ、それから行書、草書といふ順に習うてゆかなければならぬ。禪もその通りで、碧巖錄、無門關等の禪錄は、禪宗發達の後に出來たもので、云はゞ漢字の草書や、隸書の如きもので、面白いには面白いであるけれども、

禪の初歩を學ぶ者の爲めに、入り難くて且つ危険である。公案提撕は一方方便であるけれども、最初から之を行らなければならぬとなつては、楷書や行書を習はずして、初めから草書や隸書に取り着く様なものである。ソコデ余は敢て草書や隸書の碧巖錄、無門關等の禪錄提唱、公案の提撕を一概に排斥する次第では無いが、それよりも眞最初に習ふべき楷書、行書即ち禪の實修法を心得て置くことが最も必要と考へる。何となれば始めにも申す通り、禪は元來學問ではなく、理論でもなく、只これ實踐躬行の法門であるからである。

三 坐禪の意義

「禪」は梵語の「禪那」の略で、漢譯すれば靜慮といふことで、思慮を靜定するの義であるから、梵語の禪と、漢語の定とを合用して「禪定」ともいひ、又單に「定」ともいふ。禪といひ、定といひ、文字は異なるけれども、その意義は同じである。吾等が日夜間斷なく思慮分別する所のものは、多くは妄想煩惱と申して、吾等が本性の

作用ではない。譬へば一家の主人の命令では無く、番頭や手代の私の取計のやうなものである。勿論番頭や手代の取計も、主人の命令から出たのはよいのであるけれども、彼等が自分勝手な取計を致すことになれば、大變な間違が出来ることになるやうなもので、吾等が主人公なる本性が、妄想煩惱の爲めに攪き亂されて居ては、生涯顛倒苦痛を免れない。そこで此の妄想煩惱を拂ひ除けて、本來清淨なる自己の本性を徹見せねばならぬ。更に譬へて見れば、池の水が風波の爲めに攪き亂されて濁りキツて居るやうなもので、その濁りが澄んで鏡のやうにならねば、たとひ天上に一輪の明月が皎々と輝いて居ても、その影は池の水へは映らぬ。その月影が映るやうにするには、是非とも池水の濁らぬやうにせねばならぬ。禪はその風波や濁りを静めて、自己の心月が皎々と映るやうにするのが目的である。その禪の方法にも印度古代から種々行はれてあつたのであるが、釋尊は、身體の處置に就て行、住、坐、臥の四相ある中に於て、正身端坐して、心念を静めるのが最も安全であると致された。之を坐禪

といふ、即ち端坐して念慮を静めるといふが坐禪の意義である。

四五 事

サテこの坐禪をするに就ての心得方も種々あるけれども、その最も肝要なる五ヶ條の要件がある。一に持戒清淨、二に衣食具足、三に閑居靜處、四に息諸緣務、五に得善知識である。

第一に持戒清淨といふは、佛祖の定められた道德の實行條項で、これも十戒、四十八戒、貳百五十戒、五百戒等と稱してなかく、多數あるけれども、禪宗では、十重禁戒と申して、十ヶ條の戒律を心口意の三業に涉つて嚴重に守ることになつて居る。十重禁戒とは、第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒である。この十ヶ條は人類普通の道德的行爲の條項であるから、苟も坐禪をするほどの者は是非とも行はねばならぬ。若し是れさへも守れぬやうでは、何程坐禪を

行つて、よし一千七百則の公案を悉く通りぬけたところで、眞の坐禪の効果は無い。然るに謂はゆる禪僧と稱する輩にして、大酒放逸にして、猥りに自ら瞋恚を恣にして、忿怒を發して下輩を呵責し、又他人の非を擧げて之を惡口したりなどして、自分得意になつて居る者があるが、實に大なる間違である。

第二に衣食具足といふは、衣服、飲食はその身に適當な丈は必要であるから、不足の無いやうにして置かねばならぬ。それではなければ身體の健康を保つてゆくことが出来ぬ。身體が健康でなければ精神も自ら健全でない。不健全な精神では、坐禪を修めても却て精神を惱亂を來すことになる。それ故に衣食の具足を第二に置いたのである。ツマリ第一は道德の健全を計り、第二は身體の健全を計る條項である。

第三に閑居靜處とは、已に靜慮といふことを計るのであるから、その居場處が騒動であつては、心が散亂して、靜におちつけることが出来ぬ。それ故に極めて閑靜にして、氣の散らぬ處を選んで行はねばならぬ、即ち馬車往來し、多衆雜沓して、喧々囂々

々たる處を避け、綠水青山、四方閑寂の處ならよい。

第四に息諸緣務とは、諸々の仕事を息めるといふことである。經論書籍を読み、詩歌文章等を作るやうな事は、世間の商工業、政治法律等の事よりは、靜閑な仕事であるけれども、これも多く見、多く聞くのは矢張精神を勞するものであるから、坐禪の時は一切抛擲して、一意専心にやらなければならぬ。但し自分の本職を捨て仕舞へといふのではなく、坐禪の時は一切を打ち捨てかゝらねばならぬ。

第五に得善知識とは、善知識を得るといふことである。善知識とは、明眼を備へた師匠といふことで、坐禪を修めてゆく中に、種々の妄想が浮び出でる。それを知らずに行つて居ると、その妄想を認めて眞正の知見となし、自ら悟を開いたものと思ふたり、又佛菩薩の相を見たとか、神を見たとか、或は種々の奇異の現象を見たとか、いふことがある。これ等は皆禪の病である。「楞嚴經」の中に五十魔境と稱して、禪病の五十種を擧げて誡めてある。かやうな禪病に罹つた時、明眼の知識即ち名師が居

て、早く之を知つて療治をしてやらねば、遂に非常なる禍に陥る。それであるから名師に就て修行することが肝要である。以上五ヶ條は禪を修するに最も必要な事柄である。

五五調

次に禪經の中に五調といふことがある。五調とは、調食、調眠、調身、調息、調心の五つを云ふ。これは前の五事と似た處もあるが、古來叢林即ち禪僧の修行する道場に於て、この事柄を等閑にして居り、甚しきは途方もない謬に陥つて居るから、僧侶の中に非常な弊害を生じて居る。

第一に調食、これは前の「衣食具足」の條項と同じであるが、此處では他の四ヶ條と關聯して居るから少しく委しく話さう。古來禪僧は衣食ともに枯淡を旨として居るのて、衣服も極めて質素、冬は木綿、夏は麻、而も厚着を許さず、足袋などは斷じて、許さぬ。食物は特に粗末で、而も少量である。朝晩は極めて淡い、「天井ぶち」と稱する

箸を用ひずして吸ひ込まれるほどの粥に、鹽からい菜漬きり、晝は麥四分米六分の割合の粗飯に、糠味曾汁と漬物きり、この外に何等の副食物も無い。勿論間食は一切無い。これが叢林一般の食物であるが、只これ丈でも血氣盛りの坐禪僧に取つては、なか／＼堪へ難い苦痛である。その上に作務と稱して、米や麥を搗いたり、薪や柴を割つたり、水を運んだり、内外の掃除、時には畑の事をさせるといふので、随分烈しい勞働であるから、いよく以て空腹を感じる。即ち一種の苦行である。或る程度までは粗食で身體を鍛るは至極よい事であるけれども、かう極端になつては、常に食いたといふ食念ばかりに悩まされて、時あつて普通の食物に逢へば、腹の裂ける程つめ込るのであるから、胃腸病に罹り易い。佛祖の教は斯様な無理な事ではない。美食飽食は固より不可であるが、質素にして飢を感じず、身體の衰弱せざる程度に食を取つて、即ち多からず少なからず、その中位にしてゆく、之を調食といふ。道元禪師の「坐禪儀」の中にも「それ參禪は靜室宜しく、飲食節あり」とあつて、閑靜な處に居

り、飲食の節度を守るといふことが、坐禪の第一要件としてある。殊に「典座教訓」といふ書の中には、飲食の事が委しく脱いてあつて、決して今日の如く、亂暴な事をしなくてはならぬ筈である。

第二に調眠とは、睡眠を適度に行ふことである。飽食は睡の基というて、食物を多分にする睡氣を催すから、固よりよろしくない。けれども睡眠不足は神経衰弱の基であるから、飲食と共に過不及のない適度をはかつて取らねばならぬ。然るに古來叢林に於ては、兎角睡眠不足の弊がある。夜は九時に眠ることになつて居るが、晨は二時半乃至三時に起きて、曉天の坐と稱して坐禪をする。それから洗面をして、朝課と稱して、佛殿に上つて、讀經をする、この間三時間前後を要する。六時前後に朝飯即ち例の淡い粥を喫ふ。朝飯に一時間以上を要する。朝飯の後に内外の掃除をする、それから暫時休憩するのであるが、朝が餘りに早いものであるから、この休憩時間を隨意坐と稱して、坐睡をする、夏などは晝は空腹になつて居る處にウン、麥飯を食ふから、

直に眼の皮がタルミ、又晝寢をする。この外少しでも暇があれば直に睡る、これは畢竟平素睡眠不足であるからのことであるが、これでも未だ睡眠が不足であるから坐禪の時に睡る。ソウスルト巡視の役僧が「警策」と稱する檜木の棒で兩方の肩をピシッと打つ、打たれても猶ほ睡る、睡れば又打たれる、かくて二時間の坐禪に、二遍も三遍も打たれる、それであるから坐禪堂の中には、始終ピシツといふ「警策」の音が絶えぬ。睡るのは怠惰心から起るので、固より宜しくないけれども、大體飲食が不規則なる上に、規定睡眠時間が少ないから此に至るのである。「食いたいと睡たいが下女の願なり」といふ川柳は、只宿屋の下女ばかりではなく、禪堂生活をして居る僧侶は、この食いたい、睡たいの病に罹つて居る。瑩山禪師の「坐禪用心記」の中にも「衣足らず、食足らず、睡眠足らず、是を三不足と名づく、皆退惰の因縁なり」と誠めてある。然るに近古の叢林に於て、猥りに粗食をなし而も飢を凌ぐに足らぬほどの少量に減じたり、猥りに早起して睡眠不足に陥らしむる如きは、佛祖の規則を誤つ

て、徒らに世人に向つて、禪僧は常人の堪へ難い苦行をも堪へて行ふことを示して、之を誇るに過ぎぬ、かゝる弊風を改めて、衣、食、睡眠の三不足のないやうに調食、調眠の法に合ふやうに致してゆかねばならぬ。

第三に調身とは、身相を調へるといふことで、即ち坐禪の儀式によつて、正身端坐するをいふ。これも『坐禪儀』並に『坐禪用心記』等に委しく出て居るが、その肝要を示せば、坐禪の仕方に、結跏趺坐と半跏趺坐と二種がある。結跏趺坐といふは、先づ右の足を左の脛の上に安せ、次に左の足を右の脛の上に安いて兩足組み合せるのである。半跏趺坐といふは、只左の足を以て右の脛の上に安くのである。それから右の手を左の足の上に安き、左の手を右の掌の上に安き、兩の大拇手は相向ひ合ひにして相挂へる、その間は鶏卵を横にしたやうになる。かうして真直に坐つて、前後に傾かず、左右に偏らず、耳と肩と對し、鼻と臍と對するやうに致す、かうすれば自然に真直になる。これが坐禪をする時の坐り方であつて、極めて簡單であるが、サテ之を

實地に行ふことになると、なか／＼巧くゆかね。何程提唱を聞いても、問答が上手でも、公案の印可を得ても、その坐相がキチンと調うて居ないやうでは、眞の坐禪の力は無い。それ故に禪を修するには先づ以てこの坐相を調へることが肝要である。

第四に調息といふことは、出る息、入る息、即ち呼吸を調へることである。前の調身即ち坐相が調うてから、口を大きく開いて、氣海丹田というて、臍の下二寸乃至二寸五分の處へ、ウント力を入れて息を吸ひ込み、そしてその息を又その氣海丹田から、ソット吐き出す、謂ゆる深呼吸である。かやうにすること二三度してから、舌を上への齶に掛け、唇と齒とは相着け、口を堅く結んで、鼻孔より呼吸する。この呼吸が自然に調うて、長短麤細のムラが無く、微かに鼻孔から通じて、而も通じて居るか居ないかといふことが分からぬほどになる、かうなれば心念も自然に調ふ。しかしこの調息はナカ／＼容易のことでない。『坐禪用心記』にも、

若し坐禪の時、身或は熱さが如く、或は寒さが如く、或は滑なるが如く、或は堅

きが如く、或は柔なるが如く、或は重きが如く、或は軽きが如く、或は驚覺するが如きは、皆息の調はざるなり、必ず之を調ふべし。調息の法は、暫く口を張り、長息は長に任せ、短息は短に任せ、漸々に之を調ひ、稍々之れに随ふ。

とある。又數息というて、息を一から十まで數へ、十てキリ捨て、又一から數へて十に至つて止め、又一より數へて十に至る、かう息を數へて居る中に自然に息が調ふ。

第五に調心とは、心を調へて散亂せぬやうにすることである。第一の調食、第二の調眠、第三の調身、第四の調息も、皆この調心を得る爲めに必要である。サテ又この調心といふことが最も困難である。古賢先哲も種々にその方法を示して居られる。その中に「坐禪用心記」に示してある所は、解り易いと思ふから、ザットその意を述べる。

坐禪の中に心が沈み込むやうなことがあり、或は浮び出るやうなことがあり、或は心が朦朧となることがあり、或は急に銳利なることがあり、或は坐禪をして居る室の外

が判然と透いて見えたり、或は自分の身體の中の五臟六腑等が明かに見えたり、或は佛菩薩の姿が現れたり、或は急に悟つたやふな感じがしたり、或はこれまで解からなかつた經論の文句が忽ち解つたりすることがある、かやうな奇異不思議なことの起るのは、皆心が調はぬから起るので、ツマリ一種の禪病である。かやふな事は能く心得て居ないといふと、これを眞の悟りと思ふことがある。猶ほ禪病の委しいことは『禪秘要法經』『治禪病要經』等の中にも説いてあり、又前にいうた「楞嚴經」の中に、五十種も禪魔のことが説いてある。若しかやうな病が發つた時は、どうすればよいかといふに、先づ組み合せた兩趺の上に心を置いて坐る。心は無相であるから、趺の上に置きやうが無いやうなものであるけれども、只置いた氣になつて坐るのである。若し昏沈の病というて、心が沈んで昏くなるやうな時には、心を髮の生え際、又は眉間に置き、又散亂の病というて、心が風船玉のやうに、ヒョイ／＼と飛びあがり、少しも静まらぬ時は、心を鼻端、又丹田というて、臍より二寸乃至二寸五分下の

處に置くがよい。若し又平常別に變つたことのない時は、心を左の掌の中に置いて坐るのである。かくて久しい間續いて坐禪をして居れば、別に何處に心を置くといふことをせずとも、自然に散亂せぬやうになる。これ調心が自ら出来るのであるが、猶ほ未だ調心が出来ぬといふ時には、謂はゆる公案なるものを提撕する。公案といふは、古徳先賢方が一大事參究の跡、乃ち見性悟道の爲めの垂訓、又問答等であつて、彼の趙州和尚の狗子無佛性の話とか、雲門和尚の須彌山の話と稱する、到底通常の情識、分別を以て解することの出来ぬ問題である。この超論理、超智識の問題に向つて一生懸命に參究する、これは紛々として起滅する妄念分別を截斷して、直ちに自己の本性に體達せしめんが爲めの手段である。道元禪師は『坐禪儀』に、
 箇の思量底を思量せよ、思量底如何が思量せん、非思量、是れ坐禪の要術なり
 と示されてある。この思量底とは、知解分別を以て思量することの出来ぬ處とい

ふことで、即ち宇宙の本體、是非善惡、迷悟凡聖の相對を離れた絶待の平等界である。凡夫は兎角に大小長短、利害得失等の差別の現象に執着し、徒らに思量分別して、迷うて居る。そこで佛祖は、その思量分別を休めて、思量底の平等なる本體を悟れと勧められる。しかし非思量というても、無念無心というても、枯木の如く、頑石の如く、死人の如くなれといふのでは無い。それで『思量底を思量せよ』とある、思量分別の及ばぬ處を更に思量せよといふ。しからばその思量分別の及ばぬ處を思量するといふは、どうすることかといふに、有念無念、思量、不思量の度合ひを通りぬけて、平等も差別も見ない境界に至る。之を非思量といふ。非思量とは、譬へば、曇りなき明鏡が無心にして、萬物の影を映すが如く、鏡より自ら映さうというても無く、又映すまいといふのでも無く、物來れば自然に映る、歴々分明に映るけれども、毫もその痕跡は残らぬ、これを『縁に對せずして照す』とも『思量にして現す』ともいふ。坐禪の人の調心は、この非思量の處に至らねばならぬ。

以上陳べた所は、坐禪を修むるに就ての心得方で、是等の事は前にいうた「坐禪儀」や「坐禪用心記」等にも説いてあつて、今更喋々する必要は無いやうであるが、近來流行の坐禪なる者が、甚しい弊害に陥つて居て、殆ど魔道に墮して居るから、特に、囀々しく婆説を費したのである。要するに禪は學問でもなく、理論でもなく、實踐躬行すべき見性悟道の妙術であるから、以上陳べた五事、五調の規則に従つて、着實に實行すべきである。若し一日に一時間でも二時間でも、時間を定めて二ヶ月でも三ヶ月でも、引續いて實行するならば、見性大悟等の事は暫く措いて、身體自然に健強に、精神自然に爽快になることは保證する所である。(大正七年十月八日)

禪の力畢

大正八年九月五日發

行刷

禪門叢書第十一編

定價金壹圓七拾錢

著者 山田孝道

發行者 高島大圓

東京市小石川區原町六番地

印刷者 佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市京橋區西紺屋町二十七番地



發行所

東京市小石川區原町六番地
振替東京一五六八六
電話小石川一二八六

丙午出版社

東洋大學教授
曹洞大學教授
加藤咄堂先生著

佛敎概論

定價金 一圓
郵税金 十錢

佛敎の法門八萬四千これを開けば六合に瀾りこれを巻けば懷に滿たずこれを架説すれば其の盡くる所を知らざるもこれを約説すれば一默も亦其の髓を得今吾が咄堂先生多年研鑽の蕙蓄を傾け十三章四十餘節に分ちて深遠なる敎理を平易明快に横説豎説す繁簡最もその宜しきに適ひて一語の増すべきなく一句の減すべきなし

帝國大學講師
Fクトル
荻原雲來先生著

印度の佛敎

定價金 一圓
郵税金 十錢

題して印度の佛敎といふ其の最も盛なりし時代のみにても一千有餘歳に亘り廣大の方域に流傳せし宗敎なれば題説の含む所の意義太だ汎く研究愈よ深きに隨つて記すべきこと益多し著者今精討精究能くその歴史と敎義とを叙述して些の遺憾なし

東洋大學教授
境野黃洋先生著

支那の佛敎

定價金 一圓
郵税金 十錢

印度佛敎の研究も支那譯の經典に待つところ多からざるべからず日本佛敎の研究も亦支那佛敎の源流に遡らざるべからず殊に佛敎の發達は支那に於て極盛に達し日本佛敎といふと雖もその大部分はこれ支那佛敎の直譯たりしなり然るにも拘らず支那佛敎の歴史的研究は全く等閑に附せられたり著者境野先生によりて始めてこれを試みられたりしなり苟も佛敎について知るところあらむと欲するものは本書について學ばざるべからず

東洋大學教授
境野黃洋先生著

日本の佛敎

定價金 一圓
郵税金 十錢

佛敎は印度に産れ支那に生長し日本に成熟すその皇室との關係の如き申すも畏し日本の國民性はこれによりて培はれ日本の國民道徳はこれによりて基礎を築けりこれを以て未だ日本の佛敎を學ぶことなくして日本の歴史を解し日本の風俗習慣を知り日本の美術を味はんとするは恰も木に縁りて魚を索むるの類これ此の著ある所以也とす

325
378

終